

夫人聞いて驚き、且悲しむ。

「さらば君の御跡を慕ひ参らせん。」

忽ち甲を撥、馬に跨がり、門を開きて突出す。

と見れば、敵兵雲霞の如くに城兵を取巻けり。夫人槍を捻り、馬を飛ばして、驀地に敵の群中に突入す。

敵兵驚き恐れて披靡す。

清左衛門怒つて迎へ戦ふ。夫人槍を擧げて一突き突けば、清左衛門眞逆様に馬上より落つ。

夫人は尙も馬を縦横に驅つて戦ふ。宛ら猛虎の群羊を驅るが如し。信高の圍忽ち解く。信高遙かに此の體を見て政壽に語りぬ。

「扱ても勇ましき戦振りかな。去るにても彼の美少年は何者にやあらん。分部殿、御邊の部下に候はずや。」

政壽は首を掉れり。

「否な、我が部下には候はず。おゝあの色の白さよ。正しく女將軍にこそ候べけれ。」

信高眸を凝らして望み見ぬ。忽ち馬を飛ばして近づき見れば、果して夫人浮田氏なり。信高驚いて聲を掛けぬ。

夫人は信高を見て喜び且泣く。

「おゝ、君にはそれに在しまししか。わらは君既に討たれ給へりと承り、君に殉ひ参らせんとて斯くは打つて出て候なり。今や敵少しく退き候ひぬ。いざ城に入り給へ。」

與に兵を収めて城に入る。

敵復た追窮す。城兵拒ぎ戦うて死するもの五百八十人。信高夫妻相見て黯然たり。



野史氏曰く、心貞なるものは行勇なり。夫人浮田氏の單騎衆敵に當り、以て其の夫を重圍中に救へるもの、これ其の勇の致す所、而して又其の貞の致す所ならずんばあらず。(熊田葦城)

藤堂和泉守教訓

- 一、御奉公之道油断有間敷事
- 一、孝行之道忘却有間敷事

細川忠興の夫人

慶長五年、徳川家康、上杉景勝を攻めんとて關東に打向ふ。幕下の士皆従ふ。細川忠興も其の中にあり。時に、石田三成、豊臣秀頼を戴いて徳川氏を滅さんことを謀り、先づ人を細川邸に遣はして言はしめけるは、「今、世の中騒がしうて事穩かならず。夫人及び世子ともに城中に來らるべし。これ秀頼公の命なり。」と。夫人その家臣河北石見・小笠原秀清等を召して、「これ石田が謀とおほゆるぞ。我等を質にして、關東從軍の士の心を讎さしめんとての策なるべし。我死すとも此處をば去らじ。此の旨返答すべし。」といふ。使者歸る。三成押返して迫る。又元の如く返事す。三成いよく怒る。夫人竊かに老臣を引きて言ふやう、「たとひ君の命なりとも、夫の許なくて、争てか城中には入るべき。命に背きて刑罰



せられんことは固より覺悟せり。汝等能く此の旨を領せよ。」と。又曰く、「我今この命に違ひぬ。三成必ず兵を擧げて來り脅かさん。さては如何にとも術なからん。事急ならざる中に、信繁殿の後室には歳七十に餘り給へば、歩行不自由におはすべければ、忠隆の妻と共に避け奉らしむべし。」とて、やがて隣なる浮田秀家の邸へ遁れしむ。

夫人は更に霜といへる侍女を近く召寄せて、「今にも捕手來らば我は自殺すべし。汝は袋を頭に戴き、婢女の體をなし、館に炎上るを見て遁れ出でて、此の狀を我が君に申すべし。」とて、懷なる疊紙を取出し、傍なる硯引寄せて、

露をなどあだなるものと思ひけむわが身も草におかぬばかりを  
と書きて侍女に授く。侍女受取りて泣く。

さて小笠原・河北等を召して、障子越しに、「我が君は内府公に無二の忠良を盡したまひて、今東國におはしませり。其の出立たせ給ひし時、「如何なる事ありと

も此の邸をな離れそ。」と、くれぐれも宣ひおかれける其の御詞、今耳に残れるに、争て此處をたやすく去りて、石田が術中に陥るべき。我先に離別せられし時、死ぬべき命ながらへて今日あるを致せるは、これ僥倖といふべし。今更に何の惜しきことかあらん。汝等たゞ我が最後を見届けよ。斯く言へど、我決して秀頼公に背くにあらず。たとひ兵士寄せ來たりとも、ゆめぐ射向ふべからず。汝等よく計らへよ。」と懇にいふ。老臣等感泣して何の詞もなく、たゞ涙を吞みて退く。

夫人はやがて十歳になる男兒と八歳になる女兒とを招き寄せ、髪かきなてつゝ、「汝等よく母が言ふことを聞け。武士の家に生れては、死ぬべき時に死なざれば、却つて恥を蒙るものなり。今父君は軍にとて東方へおはしましぬ。其のおはさざるを知りて、敵兵あまた來りて、母と汝等とを捕へんとす。若し我等その手に捕はれなば、たゞに自らの恥のみならず、父君の御おもてふせとなるべし。如何に思ふか。」と言ふに、二人は互に顔見合せて、「我々今日まで永らへしは、たゞ母



君のおはしませばなり。母君のおほせごと争てか違ひ申さん。武士の子は死ぬるを習と申せば、只速に殺し給はれよ。おめく、敵に捕はるゝやうなること、争てしはべらん。」と、母の前に両手をつきてひれ伏す。髪はつやくとさかりて、目に少し涙ぐみたる二人の態度いかひくし。

今この有様を見る母の心、げに如何ばかりならん。三戸野にありし頃疾く死なば、かゝる辛きめは見さりしを、今まで永らへたるこそなか／＼に苦しかりけりと屢、思ひしならん。心を鬼になして幾たびか懐劍を振上ぐれども、手震ひてまた元をさめ、涙はほろ／＼とこぼるゝに、女兒は打仰ぎて、「母君よ。あはれ母君よ。未だ殺し給はざるか。我は先よりおとなしく待ち居り候ものを、などか殺し給はざる。さりとも死なずとも宜しく候か。」といふ。夫人は此の詞に勇氣いよく挫けて、手を取りてまた泣き伏す。時に門外にがう／＼と音す。罵る聲手に取るやうなり。「あゝ、今は何をか恨みん。たゞ是までなり。」と打伏したる二

人が手を取りて膝に引寄せ、拳も通れと一人づつ刺し殺し、流るゝ血を袖にて拭ひ、泣く／＼其の死骸を抱へて、持佛堂の前に至り、夫の命なきに面を他人に示すことは恥なりとて、やがて用意の綿帽子まぶかく冠り、遙かに東方を拜みて、幼兒の死骸を前に並べて、心靜かに自殺せり。小笠原秀清眉尖刀にて介錯す。即ち火を邸に放ち、乳母二人、侍女四人、炎の中に飛び入りて死す。小笠原・河北等は此の有様を見届けて自殺す。あはれ、此の立昇る一筋の炎の烟、いかなる方にか靡くらん。寄手の者ども驚き騒ぎて、此のよし具さに城中に注進す。三成も其の節操に感じ、深く悔いて人質の議を止めきといふ。(池邊義象)



## 山内一豊の妻

山内一豊織田家に出て仕へし初め、東國第一の名馬なりとて、安土に曳き來て商ふ者あり。織田殿の家人等これを見るに、誠に無雙の名馬なり。されども價餘りに貴くして、買ふべき人一人もなく、空しく曳きて歸らんとす。

その頃、一豊は猪右衛門尉と申ししが、この馬欲しく思へども、求めんこと如何にも叶ふべからず。家に歸りて、「世の中に、身貧しき程口惜しきことはなし、一豊仕への初なり。かゝる馬に乗りて見參に入れたらんには、屋形の御感にも預るべきものを。」と獨言いふ。妻はつくづくと聞いて、「その馬の價いかばかりにか。」と問ふ。「黄金十兩とこそいひつれ。」と答ふ。妻「さほどに思ひ給はんにはその馬求め給へ。價をばみづから參らすべし。」とて鏡の筥の底より黄金十兩取出

してまゐらす。一豊大きに驚き、「この年ごろ、身貧しく苦しきのみ多き頃には、この黄金ありとも知らせ給はず。いかに心強くは包み給ひけん。されども、今この馬得べしとは思ひもよらざりき。」と、且は悦び且は恨む。

妻は、「のたまふ處ことわりにこそ侍れ。さりながらこれはわらはがこの家に參りし時に、父がこの鏡の下に入れ給ひて、「あなかしこ、これ世の常の事に用ゐるべからず。汝が夫の一大事あらん時にまゐらせよ。」とて、賜ひしなり。されば、家貧しく苦しむなどいふことは世の常の習なり。これは如何にも堪へ忍びて過ぎなまし。まことか、この度都にて御馬揃あるべしなど聞ゆ。もしさもあらんには、天下の見物なり。君はまた仕への初なり。かゝる時ならでは、屋形にも傍輩にも見知られ給ふべきよしもなし、良き馬召して見參に入れ給へと思へばこそ參らすれ。」と言ふ。一豊やがてその馬を求む。

程なく都にて馬揃のありし時、織田殿この馬御覽あつて、大きに驚き給ひ、あ



つばれ名馬や、何者の馬ぞ。」と仰せありしに、「これは東國第一の馬なりとて、商人が曳きて参りしが、餘りに價貴くして誰も買ふこと叶はず。空しく歸るべかりしを、山内が買ひ得て候ひき。」と申す。信長聞し召し、「價貴き馬なり。當時天下に信長が家來ならで買ふべき人なしとて、奥よりはるく來りしを、空しく還したらんには無念の至なるべし。その山内は年頃久しき浪人と聞く。家もさぞ貧しからんに、買ひ得たることの神妙さよ。且は信長が家の恥をも雪ぎ、且は武士のたしなみいと深し。」とて、感じ給ふこと大方ならず。一豊これより次第に身を起したりといふ。(新井白石)

### 木村重成の妻

影にそふ形のごとく亡き靈も君を守りて離れざりけむ

茶臼山の和議、いかでか永へに平和を保たんや。これ元より一時の權謀に過ぎず。軍馬を休めしも束の間にて、再び夏の陣とはなりぬ。關東の寄手大舉して大阪城を圍む。故太閤の餘徳を偲びて參集せしもの、數萬騎に及べども、譜代の士少なくして、多くは只これ烏合の勇士のみ。

去年の十二月十九日、和議の御誓文御取交しの使として、主命を辱めず、而も其の威風關東武士の膽を寒からしめ、尙老將家康をして、感涙の袖を絞らしめたる木村長門守重成の妻は、眞野豊後守頼包の女なり。容姿の美にも彌増し、心優にして操いと高し。



昨日今日、夫の氣色常に變りて、食事さへ斥け、深き思案に行沈めるを見て、訝しさに堪へず、夫に向ひて、「去年今福の合戦に、君の功名の大なりしには、關東五十萬の大軍も驚けりと傳へ聞き侍る。今豊臣氏の武運は朝暮に迫れり。日頃の御高恩に報い奉るは今日なり。然るに何とて物思はしげにして、食事をさへ斥け給ふぞや。」と問ふ。重成莞爾として打笑み、「御身の訝しむも理なり。こは餘の儀にあらず、五穀胃に入りて二十四時を経ざれば消えずと言へり。今は何時討死するか圖り難し。されば穢き物を斥けて、潔き心を出さんのみ。」と、夫人これを聞きて欣然として退く。

翌朝起出づればこは如何に、夜半の嵐も吹かなくに、難波の春に先立ちて、散行く梅の花一輪、我と我が喉搔切り、見事に自害して夫を勵ましたり。重成且驚き且悲しみつゝ、妻の遺書を見れば水莖の跡鮮かに、

一樹の蔭一河の流、これ他生の縁と承り居り候が、さてもをととせの頃ほひ偕老の契をなしてより、只影の形に添ふが如く思ひ參らせ候に、此の頃承り候へば、此の世かぎりの御催の由、蔭ながら嬉しく思ひ參らせ候。唐の項羽とやらんは、世に猛き武夫なれど、虞氏の爲に名残を惜しみ、木曾義仲は松殿の局に別を惜しみきとかや。されば世に望窮りし妻が身にては、せめて御身の御在生中に最期を致し、死出の道とやらんにて待ちあげ奉り候。必ずく秀頼公多年海山の鴻恩御忘却なき様頼み上げ參らせ候。あらくかしこ。

妻より

## 長門守重成様

さても健氣なる覺悟やと、疾くに死を決したる重成の心は、妻の自殺に因りて益、固く愈、奮ひぬ。今福の合戦に一騎當千と聞えし剛の者木村重成も、元和元年五月六日、遂に安藤某の手に首は渡しぬ。

若木の櫻は散りても、誓の中の蘭麝の薫は永へに世に匂ひて、今に滅せざる、



天晴床しき重成の最期と共に並び稱へらるゝは、其の妻の最期なり。時に重成二十一歳、妻は十八歳なりき。(海上龍子)

餘りあるを待つて人を濟へば終に人を濟ふの日なく  
暇あるを待つて書を讀まば必ず書を讀むの時なし

宋、史 摺 臣

## 徳川光友の室

一

長局の方俄に物騒がし。「あれよ、あれよ。」と叫ぶ聲、ばた／＼と走る音、只事ならじと覺ゆ。

夫人は居室にあり。悠然として騒がず、徐に侍女に命じぬ。

「五條を召せ。」

老女五條は召に應じて來れり。顔色青さめ、呼吸忙し。

「何事ぞ。」

夫人の言葉未だ終らず、五條は早くも口を開けり。

「一大事の候。只今中山茂兵衛奥女中を刺し殺し、血刀を提げて部屋々々を騒が



し候。あれく、あのやうに騒ぎ居り候。此處におはしましては心許なし。早々御動座遊ばさるべし。」

夫人はきつと五條の顔を見遣りぬ。

「それしきの事、なに一大事といふべきぞ。茂兵衛は亂心せりところ覺ゆれ。當番の男どもやがて取鎮むべければ、構へて騒ぐべからず。其處にゐよ。何の周章つることかある。」

夫人は端然として座をも動かさず。茂兵衛は間もなく庭中の井戸に身を投じて果てけり。事乃ち已みぬ。

二

一年は夢の如く過ぎぬ。

「去年の今日は茂兵衛が奥女中を殺しし日には候はずや。あの時の恐しさ今に忘れ候はず。」

侍女等次の室に在りて、當時の事ども語り合ひけり。

折柄一天俄に搔曇れり。

風捲き、雨奔り、電閃き、雷轟く。天色黯澹として晝なほ夜の如し。侍女等は顛ひ戦きぬ。夫人は従容として平常の如し。忽然火柱立ちぬ。轟々として天地も碎けんばかりに鳴りはためきぬ。先に茂兵衛の投ぜし井戸に雷の落ちけるなり。

侍女の中には、或は倒れ、或は氣絶する者あれども、夫人は顔の色だに變へず。

三

人は此處に投じ、雷は此處に落つ。

「不吉の井戸は埋めんこそ好けれ。」

奥役の議は忽ちに決しぬ。

夫人は大久保金兵衛を召して諭せり。

「雷の落ちたる井戸を不祥なりとせば、此の邸、此の庭、また皆不祥として改む



べきに非ずや。井戸は底を浚へ、水を替ふれば仔細なきものぞ。舊き井戸を塞ぎて新しき井戸を穿つは、人を勞するのみにて何の益もなき事ぞかし。」  
 金兵衛その理に服しぬ。埋井の議乃ち止みぬ。夫人の言ふところ理義極めて明白、人をして之を諍ふの辭なからしむ。識見雋邁なるに非ずんば能はじ。賢夫人与謂ふべし。(熊田葦城)

破鏡復び照らさず落花枝に上り難し

古 詩

小兒將來の運命は母の働き如何による

ナボレオン

# 春日局

(山科隱宅の場)

人物 稻葉佐渡守正成

稻葉内室おふくの方 (後に春日局)

稻葉の子息 千熊

同 七之丞

同 内記

稻葉の家來 林 伴作

同 田邊新左衛門

同 塚田左兵衛

板倉伊賀守勝重

角倉與一



庄屋九郎兵衛

時 慶長十七年九月下旬頃

稻葉佐渡守正成が山科の奥に蟄居せる處なれば、百姓家の體にて、その外庭の處に刈入れたる稻を積みたり。稻葉の家來、林伴作、塚田奎兵衛、田邊新左衛門、庄屋九郎兵衛、地びたに平伏す。角倉花道の方に向つて「板倉殿の御供。」と大聲にて呼ぶ。引馬、挾箱、槍杖、合龍等列をなして迎に來る。板倉目禮して、角倉庄屋あとにつづきて花道に入る。

この時、稻葉佐渡守（羽織、太刀付大小、編笠、鐵砲を肩に擔ふ。）は次男七之丞（袴股立高く取り、大小をさし、鳥猿の類を重さうに背負ひ居る。）と共に下手の方より出で、板倉が今歸るところを見て、折悪しと云ふ思ひ入れにて、外庭の竹垣の陰に隠る。板倉もちらりと見て見ぬふりす。板倉の供づれが花道に入るを合圖に、舞臺廻りて住居の座敷となる。

正面に見ゆる障子悉く明きて、壁際に甲冑、弓箭、鐵砲を並べ、なげしには手槍、長刀など掛けたり。

おふくの方（春日局）は木綿の着物を着て、千熊、内記と共に坐して居る。外庭の方より「お歸り、お歸り。」と案内の聲聞えて、佐渡守、七之丞と共に入り來る。

ふく「御機嫌よく御歸り遊ばしました。今日もお獲物澤山で、おめでたう存じます。」

佐渡守「七之丞、奥へ入つて休息せい。……奥、いま歸りたるは板倉伊賀守であつたな。定めて昨日申し入れたるおことが御奉公の一條であつたらうが、おことは何と返答おしやつたか。」

ふく「左様で御座ります。昨晚申し上げたる通り、推量に違はず徳川家で御座りまして、しかも竹千代様の御守役にと申す事ゆゑ、ともかくも御請を仕り、關東へ下り、大御所様の上意を伺ひ、私の存じ寄りをも申し上げたる上にて、御役目の御請はその時に改めて仕りませうと答へまして御座ります。」

佐渡守「それは大慶至極の事であつた。然らば、おことは愈、御奉公に出ようとい



ふ了見を定めたな。」

ふく「夫に離れ、子に別れて、今更奉公いたすと申すも、好ましからぬ事では御座りますが、第一には三代の天下を知し召す若君様を守り立てまするは一身の譽、且は一家の面目。次に私が御奉公の縁を以て、ゆくゆくは三人の子供が身の出世とも相成りませうかと存じますれば、力の及ばんほど他事なう御奉公して、さすがは佐渡守が妻、内藏助が娘ぞと云はれたう御座ります。」

佐渡守「さすが、さすが。昨夜その事承つたる時に、勧めたくはありつるが、氣骨も折れ、苦勞をも重ぬべき奉公をせよとは、まさか夫の口より言ひかねたれば、おことが心まかせにとは申したり。然るに、さる決心の上は、おことがためにも三人の悴等がためにも、この上もなき仕合はせてはあるぞ。當時世界廣しと雖も、恐らく大御所程の明君は二人とあるべしとも覺えねば、その御目かねにかかつたること、まことに武門の冥加ぞや。かほどの明君のおはしますに、

如何なれば佐渡は果報つたなくて、いふがひもなき小早川殿をば主とは頼みしか。殿には、去る慶長五年關ヶ原の一戦に、おぞましくも利欲に心を奪はれ、太閤殿下の舊恩を打捨て、松尾山の御裏切は武士にあるまじき御振舞。尤も、佐渡はその際まで夢にも知らず候ひつれども、あれ見よ、あの佐渡めも裏切武士よと、後指ささるる事の口惜しさに、筑前を退去して本國美濃に引籠り、程なく此處には閑居して、もはや再び武士を立つまじと決心し、大阪方には固より附かず、さりとして今更外外の大名に召抱へられんも心うく、ただこのままに朽果てんと存ずれど、あたら三人の悴まで、ともに日蔭の身となして、青き雲をば餘處に見て、白きふせ屋に起き臥しし、頼みある世を徒に送らす事の口惜しさよ。幸なるかな、この度おことが出世、奉公の憂さもつらさも子供のためと思ひなし、せいぜい勤に心を入れよ。それまでのところは、及ばずながら某が、悴どもをたしかに預かり、文武の稽古いたさすべし。併し、御沙汰のな



き内は、ゆめゆめ忤どもがこと申し上ぐな。大御所様には、却つて御氣色に障らせ給ふべきぞ。ただかの方様より仰せ出されあるを待つべし。心得たるか。」  
ふく「段段の御教訓あり難う存じます。只今も伊賀守殿が、千熊をば同道いたし、竹千代様の御小姓に差出せよと深切の心づけて御座りましたが、先づ私一人にて罷り出て、その上の事と申し置きました。」

佐渡守「むむ、出来された、出来された。さありてこそ佐渡の妻。千熊が事も、七之丞、内記が事も、萬事御沙汰次第にせよ。構へて此方よりおくびにも申し上げまいぞ。三人が立身するもせぬも、皆おことの勤ぶりによる事なるぞ。して、おことはいつ出立はしやるか。」

ふく「御暇下されます上は、後とも申さず、只今より直に支度して京へ上り、伊賀守殿方へ参るで御座りませう。」

佐渡守「さりとは急の出立。併し、心を決するからは、空しく月日を送ること、

武士の本意にあらず。あとあとの事は少しも案ずるに及ばねば、心置なくめでたう出立しやれ。」

おふく奥に入る。佐渡守家來三人よび出し、盃の支度を申し付け、三人の忤にも「着服を改めよ。」と申し付ける。

家來三人、忤三人、いづれも紋付袴にて並ぶ。佐渡守も袴を著け、真中に盃を出し、のしを持出す。

この時、おふくは袖の黒の紋付、高はしよりにて、大小二つの風呂敷包を持ちて奥より出で来る。

佐渡守「奥、今日はめでたい門出。わざと式ばかりの盃いたさう。」  
ふく「有難う存じます。」

佐渡守目で差圖する。家來のしを出す。佐渡守受取つて自らおふくの前へ出す。おふくいただきて、のし臺を下に置く。佐渡守盃を取り、一杯のみて、自らそ



の盃臺をおふくの前に出す。おふくいだいて盃を取る。家來酌をする。おふく一口のんで、

ふく「水盃とは。」

佐渡守「これぞ稻葉家出陣の吉禮。こたびおこと大御所様の御見出しに預かりて、關東に赴き、竹千代様の御守役と相成るからは、竹千代様御代御相續までは御側はなれず附添ひ奉り、萬事に心を注ぐべし。將軍家には公達も御一人にてましまさねば、事によつたら、その方方様に思ひ思ひに心を寄する者あつて、御身の上に如何なる御危難なしも申されまい。その御危難の大波は打つて乗越え、小波は開いてかいくぐり、右に避け左にのがれ、のつびきならぬその時には、一命を抛つて若君の御安泰を謀り參らするが御守の役目。されば、若君にかしづき奉るその日より、戰場にある心得にて、一命を的に勤められよ。未練にも夫子に引かされ、早く無事に歸りたいななどと、卑怯の了見ある時は、大

事の場合に不覺を取るべし。依つて出陣の吉禮にならひ、水盃まゐらせたり。」  
ふく「重ね重ねの御教訓、肝にこたへまして御座ります。たとひ如何程の艱難辛苦を受けましても、決して未練な心を起し、家門の汚となるやうな事は致しませぬ。どうぞ御安心下されませ。」

佐渡守「それを聞いて安堵いたした。」

佐渡守差したる短刀を取上げ、

佐渡守「この短刀は稻葉家の重寶、高平の作。もとは新田家の品にて、吉野朝の頃に勇婦の譽ありし伊賀局が守刀とは申し傳へたり。少し寸は延びつれども、若君を守護し奉る料にと、改めて進じ申す。」

ふく「有り難き御刀、たしかに頂戴仕ります。」

と、戴きて直に帯にさす。これより盃の水を三人の俵にのませ、家來にも盃して終る。



ふく「これ千熊、七之丞、内記、先程より承りつらんが、この母はな、只今より遠きあたりに奉公せんとて出立いたせば、留守のうちは、必ず必ず父上の仰通りに文武の稽古を勵まうぞ。わるいたづらして怪我すなよ。薄著して風ばし引くな。兄弟いさかひせまいぞよ。家來に向つて無理いふなよ。かねて教へたる實語教に、『父母には朝夕に孝にせよ。師君には晝夜とも仕へよ。友と交はつて諍ふ事なかれ。己が兄には禮敬を盡し、己が弟には愛願を致せ。』とある事を忘れまいぞ。」

千熊「畏まりました。」

七之丞「母様いつお歸りなされます。」

ふく「いつ歸ると、あてはなけれど、そのうちに歸るか、又は迎のものを遣はして、三人とも呼寄せませう。」

内記「母様、坊は一緒に行きたい。」

七之丞「わたしも一緒に。」

と、兩方より繩る。

ふく「でも聞分けのわるいこと。父上がおはしますのに、それ捨てて、母と行きたいと申すか。不孝な子ではあるわいなう。」

七之丞、内記「いやいや、父上も御一緒に行きたい行きたい。」

佐渡守「てもさても、兩人とも未練のふるまひ、控へ居らぬか。母上は用向きあつて、暫し遠方へ旅だちせらるるに、その間、その方たちは父の側に居て、留守が出来ぬと申すか。それでも侍の子か。」

七之丞、内記「恐れ入りました。立派にお留守を致します程に。」

千熊「どうぞ父上母上、御勘辨を願ひます。」

ふく「おお、よい子ぢや、よい子ぢや。それでこそ武家の御子息。」

と、涙をおしかくして、小さき風呂敷をはすかかりに背負ふ。



伴作「私は京まで御荷物を背負つて御供仕りませう。」

と、大小、草鞋、太刀附にて、大風呂敷を背負ふ。

此處にて舞臺早く廻りて、元の外庭となる。

おふくは伴作を連れて出て行く。佐渡守三人の子供、家來兩人、みなみな見送る。

佐渡守「然らば無事で。」

ふく「あなたも御無事で。子供の事はくれぐれも願ひます。新左、左、よう頼んだぞよ。」

新左衛門、左兵衛「御氣遣あそばすな。」

内記、七之丞の兩人また飛びだして、おふくの袖に縋らうとするを、佐渡守兩方の袖の下に入れて悲嘆のしうち。千熊はわつと泣伏す。

佐渡守「心置なく、めでたう出立しやれ。」

(福地櫻痴)

### 瀧鶴臺の妻

長門國萩の藩士某の家に女子あり。容姿はなほ醜くければ年長ずるまで娶るものなし。父母これを憫み、もし媒人あらばたとひ貧賤のものたりとも許して嫁せしめむとおもへど、女は自ら配偶を擇びて妾りに人に嫁することを好まず。平生人にかたりけるやう、妾は瀧鶴臺先生の如き人を得て夫とせむことを望むとぞいひける。當時鶴臺といへるは博學方正の學者にて、衆の爲に推尊せらるゝ人なりければ、これを聞くもの皆其の女の望の過分なるをあざけり笑へり。さるを鶴臺この由聞きて、「此の女こそ實に己を知るものなれ。必ずよく家を治むべし。」とて、遂に娶りて妻とせり。女、鶴臺の家に嫁してより夫に事ふる、いと柔順にして、よく家を治めしかば、鶴臺も亦之を愛し、事ごとに必ず妻に謀り、彼女も亦そ



の見たところ甚だ高くして、夫の爲に計畫する事其のよろしきをえざるはなし。鶴臺偶、客と對話するときは、陰かに之を戶外よりうかゞひ、若し話の序に幕政の事に及ばば、或は忌憚に觸るゝの恐なからしめむが爲、後に之を諫むるなど、小心翼翼其の注意いたらざる事なかりき。かくて居ること數年一日の如し。ある日、事に従ふのとき、誤つて袂の中より赤絲をくるめたる毬子をおとせり。鶴臺怪しみて之を問ひしに、妻羞づる色ありて答ふるやう、「私の愚昧つねに事をとるに過多し。故にその過を少くせむことをおもひ、赤白二個の絲毬を製して袖の中をさめおき、もし悪念のおこるときは赤絲を添へてこれを結び、善念の萌すときは白絲を加へて結びけるに、一二年のほどは赤毬益、大きくなりて、白毬はさらに多きを加へざりき。それよりいたく自省して謹慎を加へしかば、近きころは漸く赤白二毬の大きさ同じほになりぬ。これ全く良人の善行に化せられしによれり。されど未だ白毬の方赤毬よりも大なる事能はざるは、いとも慚づべき事に侍り。」

とて、やがて袖の中より一個の白毬を取出だして示したれば、鶴臺大いにその嗜みのあつきに感じ、自ら省みて益、其の徳を修めしとぞ。(女子鑑)

夫婦の道は別を主とす。人に男女あれば夫婦あり。されども男女の間には別といふ教なき時は必ず亂るゝこと禽獸に異ならず。故に夫婦の間にも別ありて敬を失はず、内外の分を嚴にすべきことなり。

會 澤 安



## 安井夫人

「仲平<sup>ちゅうへい</sup>さんはえらくなりなさるだらう。」といふ評判と同時に、「仲平<sup>ちゅうへい</sup>さんは不男だ」といふ蔭言が清武一郷に傳へられてゐる。

仲平の父は日向の國宮崎郡清武村に二反八畝程の宅地があつて、そこに三棟の家を建て、住んでゐる。財産としては、宅地を少し離れた處に田畑を持つてゐて、年來家で人に漢學を教へる傍、耕作をやめずにゐたのである。しかし仲平の父は三十代に江戸へ修行に出て、中一年置いて、歸國してから、段々<sup>カッ</sup>飯肥<sup>ツツ</sup>藩に任用せられるやうになつたので、今では田畑の大部分を小作人に作らせることにしてゐる。

仲平は二男である。兄文治が九つ、自分が六つの時、父は兄弟を残して江戸へ立つたのである。父が江戸から歸つた後、兄弟の背丈が伸びてからは、二人共毎朝書物を懷中して畑打に出た。そして外の人<sup>ウチノト</sup>が煙草休をする間、二人は讀書に耽つた。

父が初めて藩の教授にせられた頃の事である、十七八の文治と十四五の仲平とが例の畑打に通ふと、道て行き逢ふ人が、皆言ひ合せたやうに二人を見較べて、連があれば連に何事をかかさやいた。背の高い、色の白い、目鼻立の立派な兄文治と、背の低い、色の黒い、片目の弟仲平とが、いかにも不釣合な一對に見えたからである。兄弟同時にした疱疹<sup>かぶ</sup>が、兄は軽く、弟は重く、弟は大痘痕<sup>おほつぶあと</sup>になつて、剩へ右の目が潰れた。父も小さい時疱疹をして片目になつてゐるのに、又仲平が同じかたはになつたのを思へば、偶然と云ふものも残酷なものだと云ふ外はない。仲平は兄と一緒に歩くのをつらく思つた。そこで朝は少し早目に食事を済ませて、一足先に出、晩は少し居残つて仕事をして、一足遅れて歸つて見た。しかし



行き逢ふ人が自分の方を見て、連とさゝやくことは息まなかつた。そればかりではない。兄と一緒に歩く時よりも行逢ふ人の態度は餘程不遠慮になつて、囁く聲も常より高く、中には聲を掛けるものさへある。

「見い、今日は猿がひとりで行くぜ。」

「猿が本を読むから妙だ。」

「なに、猿の方が猿曳よりは好く読むさうな。」

「お猿さん、今日は猿曳はどうしましたな。」

交通の狭い土地で、行き逢ふ人は大抵識り合つた中であつた。

仲平は一人で歩いて見て、二つの發見をした。一つは自分がこれまで兄の庇護の下に立つてゐながら、それを知らなかつたと云ふことである。今一つは驚くべし、兄と自分とに渾名が附いてゐて、醜い自分が猿と云はれると同時に、兄までが猿曳と云はれてゐると云ふことである。仲平はこの發明を胸に藏めて、誰にも話

さなかつたが、その後は強ひて兄と離れ離れに田畑へ往反しようとはしなかつた。

仲平に先だつて、體の弱い兄の文治は死んだ。仲平が大阪へ修業に出て篠崎小竹の塾に通つてゐた時に死んだのである。仲平は二十一の春、金子十兩を父の手から受取つて清武村を立つた。そして大阪土佐堀三丁目の藏屋敷に著いて、長屋の一間を借りて自炊をしてゐた。儉約の爲に大豆を鹽と醬油とて煮て置いて、それを飯の菜にしたのを、藏屋敷では「仲平豆」と名づけた。中一年置いて、二十三になつた時、故郷の兄文治が死んだ。學殖は弟に劣つてゐても、才氣の鋭い若者であつたのに、兎角病氣で、到頭二十六歳で死んだのである。仲平は訃音を得て、直に大阪を立つて歸つた。

その後、仲平は二十六で江戸に出て、古賀侗庵の門下に籍を置いて、昌平學に入つた。痘痕があつて、片目で背の低い田舎書生は、ここでも同窓に馬鹿にせられずには濟まなかつた。それでも仲平は無頓著に黙り込んで、獨り讀書に耽つて



みた。座右の柱に半折に何やら書いて貼つてあるのを、からかひに來た友達が讀んで見ると、

今は音を忍が岡の時鳥いつか雲井のよそに名告らん。  
と書いてあつた。

「や、えらい抱負ぢやぞ」と、友達は笑つて去つたが、腹の中では稍、氣味悪くも思つた。これは十九の時漢學に全力を傾注するまで、國文をも少しばかり研究した名残で、わざと流儀違の和歌の眞似をして、同窓の揶揄に酬いたのである。

仲平はまだ江戸にゐるうちに、二十八で藩主の侍讀にせられた。そして翌年藩主が歸國せられる時、供をして歸つた。今年の正月から清武村字中野に藩の學問所が建つことになつて、工事の最中である。それが落成すると、六十一になる父滄洲翁と、去年江戸から藩主の供をして歸つた二十九になる仲平さんとが、父子ともに講壇に立つ筈である。その時滄洲翁が息子に嫁を取らうと云ひ出した。併

し之は決して容易な問題ではない。

江戸がへり、昌平饗仕込と聞いて、「仲平さんはえらくなるだらう。」と評判する郷里の人達も、痘痕があつて、片目で背の低い男振を見ては、「仲平さんは不男だ。」と陰言をいはずには置かぬからである。

滄洲翁は江戸までも修業に出た人である。倅仲平が學問修業も一通り出來て、來年は三十にならうと云ふ年になつたので、是非嫁を取つて遣りたいとは思ふが、その選擇のむづかしい事には十分氣付いてゐる。

背こそ仲平程低くないが、自分も痘痕があり、片目であつた翁は、異性に對する苦い經驗を嘗めてゐる。識らぬ少女と見合ひをして、縁談を取り極めようなどと云ふことは、自分にも不可能であつたから、自分と同じ缺陷があつて、しかも背の低い仲平の爲には、それが不可能であることは知れてゐる。仲平の嫁は、早くから氣心を識り合つた娘の中から選び出す外はない。翁は自分の經驗からこん



な事をも考へてゐる。それは若くて美しいと思はれた人も、暫く交際してゐて、智慧の足らぬのが暴露して見ると、その美貌は何時か忘れられてしまふ。又三十九になり、四十になると、智慧の不足が顔に現れ、昔美しかつた人とは思はれぬやうになる。之とは反對に、顔貌には疵があつても、才人だと、交際してゐるうちに、その醜さが忘れられる。又年を取るに従つて、才氣が眉目をさへ美しくする。仲平なども只一つの黒い瞳をぎらつかせて物を言ふ顔を見れば、立派な男に見える。之は親の最良目ばかりではあるまい。どうぞ、あれが人物を識つた女を嫁に貰つて遣りたい。翁はざつとかう考へた。

翁は五節供や年忌に、互に顔を見合ふ親類の中で、未婚の娘をあれかこれかと思ひ浮べて見た。一番華やかで人の目に附くのは、十九になる八重と云ふ娘で、之は江戸風の化粧して、江戸詞を遣つて、母に踊を仕込まれてゐる。之は貰はうとした所で來さうにもなく、又好ましくもない。形が地味で、心の氣高い、本も

少しは讀むと云ふ娘は無いかと思つて見ても、生憎さう云ふ向きの女子は一人もない。どれもく平凡極つた女子ばかりである。

あちこち迷つた末に、翁の選擇は到頭手近い川添の娘に落ちた。川添家は同じ清武村の大字今泉、小字岡にある翁の夫人の里方で、そこに仲平の従妹が二人ある。妹娘の佐代は十六で、三十男の仲平が嫁としては若過ぎる。それに器量好しと云ふ評判の子で、若者どもの間では「岡の小町」と呼んでゐるさうである。どうも仲平とは不釣合な様に思はれる。姉娘の豊ならもう二十で、遅く取る嫁としては、年齢の懸隔も甚だしいと云ふ程ではない。豊の器量は十人並である。性質には之と云つて立ち優つた所はないが、女に珍しく快活で、心に思ふ儘を口に出して言ふ。その思ふ儘が如何にも素直で、なんのわだかまりもない。母親は「臆面なして困る」と云ふが、それが翁の氣に入つてゐる。

翁はかう思ひ定めたが、さてこの話を持ちこむ手續に窮した。何時も翁に何か



言はれると、謹んで承ると云ふ風になつてゐる少女等に、直接に言ふことは勿論出来ない。外舅・外姑が亡くなつてからは、川添の家には卑屬しかゐらないから、翁がうかと言ひ出しては、先方で當惑するかも知れない。他人同士では、かう云ふ話を持出して、それが不調に終つた後は、少くも暫くの間、交際がこれまで通りに行かぬことが多い。親戚間であつて見れば、その邊に一層心を用ひなくならない。

茲に仲平の姉で、長倉の御新造と云はれてゐる人がある。翁は之に意中を打明けた。

「亡くなつた兄さんのお嫁になら、一も二もなく來たのでございませう」と云ひ掛けて、御新造は少しためらつた。御新造はさう云ふ方面からはお豊さんを見てゐなかつたのである。併しおとう様に頼まれた上で考へて見れば、外に弟の嫁に相應した娘も思ひ當らず、又お豊さんが不承知を言ふに定つてゐると思はれぬ

ので、御新造は到頭使者の役目を引受けた。

川添の家では雛祭の支度をしてゐた。奥の間へ色々な書付をした箱を一ぱい出し散らかして、その中からお豊さんが内裏様やら五人囃子やら一つ／＼取出して、綿や吉野紙を除けて置き並べてゐると、妹のお佐代さんがちよ／＼手を出す。

「好いから、わたしに任せてお置き。」とお豊さんは妹を叱つてゐた。

その障子をあけて、長倉の御新造が顔を出した。手には、みやげに切らせて來た緋桃の枝を持つてゐる。

「まあ、お忙しい最中でございますね。」

お豊さんは尉姥の人形を出して、箒と熊手とを人形の手挿してゐたが、その手を停めて桃の花を見た。

「お内の桃はもうそんなに咲きましたか。こちらのはまだ苔がずつと小さうございます。」



「出掛けに急いだものですから、ほんの少しばかり切らせて來ました。澤山お活けになるなら、いくらでも取りにおよこしなさいよ。」

かう云つて御新造は桃の枝をわたした。お豊さんはそれを受取つて、妹に、

「こゝはこの儘そつくりして置くのだよ。」と云つて置いて、桃の枝を持つて勝手へ立つた。御新造は跡から附いて來た。

お豊さんは臺所の棚から手桶を下して、それを持つて側の井戸端に出て、水を一釣瓶汲込んで、それに桃の枝を投入した。すべての動作がいかにも甲斐々々しい。使命を含んで來た御新造は、これならば弟の嫁にしてもよからうと思つて、微笑を禁じ得なかつた。下駄を脱ぎ棄て、臺所にあがつたお豊さんは、壁に吊してある竿の手拭で手をふいてゐる。その側へ御新造がすり寄つた。

「安井では仲平にお嫁を取ることになりました。」  
劈頭に御新造は主題を道破した。

「まあ、何處から。」

「そのおよめさんは。」と云ひさして、じつとお豊さんの顔を見つつ、

「あなた。」

お豊さんは驚き呆れた顔をして黙つてゐたが、暫くすると、その顔に笑が湛へられた。

「嘘でせう。」

「本當です。わたし、そのお話をしに來ました。これからお母様に申し上げようと思つてゐます。」

お豊さんは手拭を放して、両手をだらりと垂れて、御新造と向き合つて立つた。顔からは笑が消え失せた。

「わたし、仲平さんはえらい方だと思つてゐますが、夫にするのは厭でござい  
ます。」



冷然として言ひ放つた。

お豊さんの拒絶が餘り簡明に發表せられたので、長倉の御新造は話の跡を繼ぐ餘地を見出すことが出来なかつた。併しこれ程の用事を帯びて来て、それを二人の娘の母親に話さずにも歸られぬと思つて、直談判をして失敗した顛末を、川添の御新造にざつと言つて置いて、ギヤマンのコツプに注いで出された白酒を飲んで暇乞をした。

川添の御新造は仲平最辰だつたので、ひどくこの縁談の不調を惜しんで、お豊にしつかり言つて聞かせて見たいから、安井家へは當人の輕率な返事を打明けずに置いてくれと頼んだ。そこでお豊さんの返事を以て復命することだけは、一時見合せようと、長倉の御新造が受合つたが、どうもお豊さんが意を翻さうとは信ぜられないので、

「どうぞ無理にお勧めにならぬやうに。」と言ひ残して起つて出た。

長倉の御新造が川添の門を出て、道の二三町も来たかと思ふ時、後から川添に使はれてゐる下男の音吉が驅けて来た。「急に話したい事があるから、御苦勞ながら引返して貰ひたい。」と云ふ口上を持つて来たのである。

長倉の御新造は意外の思をした。どうもお豊さんが、さう急に意を翻したとは信ぜられない。何の話であらうか。かう思ひながら、音吉と一緒に川添へ戻つて来た。

「お歸りがけを、わざ／＼お呼戻し致して済みません。實は存じ寄らぬ事が出来まして。」

待ち構へてゐた川添の御新造が、戻つて来た客の、座に著かぬうちに云つた。

「はい。」

長倉の御新造は女主人の顔をみまもつてゐる。

「あの仲平さんの御縁談の事でございますが、私は願うても無い好い先だと存



じますので、お豊を呼んで話を致して見ましたが、やはり参られぬと申します。さう致すと、お佐代が姉にその話を聞きまして、私の所へ参つて、何か申したさうに致して、申さずにをりますのでございます。『なんだえ』とわたくしが尋ねますと、『安井さんへわたくしが参ることは出来ずまいか。』と申します。およめに往くと云ふことは、どう云ふわけのものか、ろくに分らずに申すかと存じまして、色々聞いて見ましたが、あちらで貰うてさへ下さるなら、自分は往きたいと、きつぱり申すのでございます。如何にも差出がましい事でございまして、あちらの思はくもいかがとは存じますが、兎に角あなたに御相談申上げたいと存じまして。』と、さも言ひにくさうな口振である。

長倉の御新造は愈、意外の思をした。父はこの話をする時、『お佐代は若過ぎる。』と云つた。又『あまり美人でなあ。』とも云つた。併しお佐代さんを嫌つて居るのでないことは、平生から分つてゐる。多分父は釣合を考へて、年が行つてゐて、

器量の十人並なお豊さんをと望んだのであらう。それに若くて美しいお佐代さんが来れば、不足はあるまい。それにしても控目で無口なお佐代さんが、よくそんな事を母親に云つたものだ。これは兎に角父にも弟にも話して見て、出来る事なら、お佐代さんの望通りにしたいものだ、と、長倉の御新造は思案して、かう云つた。

「まあ、さうでございませうか。父はお豊さんをと申したのでございますが、私がちよつと考へて見ますに、お佐代さんでは悪いとは申さぬだらうと存じます。早速あちらへまゐつて、申して見ることに致しませう。でもあの内氣なお佐代さんが、よくあなたに仰しやつたものでございませうね。」

「それでございます。私も本當にびつくり致しました。子供の思つてゐる事は何から何まで分つてゐるやうに存じてゐましても、大違でございませう。お父様にお話し下さいますなら、當人を呼びまして、此處で一應聞いて見ることに致しませう。」



かう云つて、母親は妹娘を呼んだ。

お佐代は恐る／＼障子を開けて這入つた。母親は云つた。

「あの、さつきお前の云つた事だがね、仲平さんがお前のやうなものでも貰つて下さることになつたら、お前きつと往くのだね。」

お佐代さんは耳まで赤くして、

「はい。」と云つて、下げてゐた頭を一層低く下げた。

長倉の御新造が意外だと思つたやうに、滄洲翁も意外だと思つた。併し一番意外だと思つたのは婿殿の仲平であつた。それは皆怪訝すると共に喜んだ人達である。が、近處の若い男達は怪訝すると共に嫉んだ。そして口々に、「岡の小町が猿の處へ往く。」と噂した。そのうち噂は清武一郷に傳播して、誰一人怪訝せぬものはなかつた。これは喜や嫉の交らぬ只の怪訝であつた。

婚禮は長倉夫婦の媒酌で、まだ桃の花の散らぬうちに済んだ。そしてこれまで

只美しいとばかり云はれて、人形同様に思はれてゐたお佐代さんは、繭を破つて出た蛾のやうに、その控目な、内氣な態度を脱却して、多勢の若い書生達の出入する家で、天晴地歩を占めた夫人になりおほせた。

十月に學問所の明教堂が落成して、安井家の祝筵に親戚故舊が寄り集つた時は、美しくて、しかもさつぱりした若夫人の前に、客の頭が自然に下つた。人に擲<sup>な</sup>撥<sup>か</sup>はれる世間の嫁さんとは、全く趣を殊にしてゐたのである。

× × × × × × ×

仲平が天下の大儒安井息軒となりおほせたに就いては、誰がお佐代さんの内助の功を否まれよう。お佐代さんは五十の歳の春から床について、五十一になつた年の正月四日に亡くなつた。夫仲平が六十四になつた年であつた。(森 鷗外)



稻生恒軒の妻

はる子は江戸の人にて河瀬外記の子なり。幼きより繼母につかへてねんごろなること、實母に事ふるがごとく、孝順にして常に其の心を喜ばしめけるが、繼母の身まかりし後は、その生むところのをさな兒どもを育てめぐみ、家事を理めて忘ることなくつとめはげみしが、その後稻生恒軒に嫁して、よくその身をつゝしみ、柔順貞操の聞えあり。かつて舅姑の大阪にありし時は常に消息を怠らず、のち淀に移りすみ、その身も江戸よりのほりけるが、此の時舅は已に身まかりければ、姑につかへて孝養を盡せり。はる子性質奢侈をにくみ儉素をこのみしかど、常に人の爲に益あることには力をつくして助けすくひ、その婢僕をつかふにも慈愛を専らとして恩恵を加へしかば、みな喜びてつかへけり。また女紅をよくして補綴裁

縫のことどもいさゝかも人手をからず、皆みづからの勤となし、はた読み書きの道にも暗からねば、日々往來の書信より、貨器の贈答、及び衣服器物の調製まで、詳に簿冊に登記して、いさゝかも遺す事なし。はる子五歳の時母を喪ひ、その事蹟を詳にしる山なきをうれへ、よく／＼人に問ひ質して、略、其の世系の始末及び性行内治の跡を知ることを得、これを書き記して七卷となしぬ。凡そ婦女たるものゝ、父母舅姑に事ふるさま、修身齊家の道も盡くこの書に具はれり。その行にいたりてはものごとくに慎みふかく、よく内ををさめて夫をたすけ、はた祖先の祭祀を怠らず、忌日には必ず供饌香花など自らこれを取りまかなひ、時として珍しき果物など獲ることあれば、必ずこれを祖先の靈に供し、而して己の親族の忌日には心に悼み慎むまでにて、これを祖先舅姑の祭祀にひとしうせず。人の婦たるものは誰もかくすべきものなりと言へりしとぞ。平常觀音經を誦し、もろこし聖人の教を崇み、小學を好み、日毎にこれを子弟に教へて勵みならはせ、その常



に交るところの友、賢きものなれば限りなく喜び、然らざればこれを戒めさとしけり。元祿八年のころ、年七十七にてみまかりぬ。あらかじめ死期をしりて、あとくゝの事どもを詳に記しとゞめ、又その子及び妹には書をのこして別れをつけ、その中にも修身齊家の肝要なることどもを記しつけて、これを教へしなど、まことに婦女たるものゝ龜鑑となすべきなり。(女子鑑)

羅綺千箱も一暖に過ぎず

食前方丈も一飽に過ぎず

老子解

梅田雲濱の妻

(琵琶歌)

大比叡おほひみや小比叡こひみを吹きおろす、風に落葉の音添へて、山越す雲の果はたけより、折々零す玉霰たまご、檐のきにたばしる初冬の、空凄まじき景色哉。こゝは都の片ほとり、柱傾き屋根朽ちて、時雨もいたく古寺を、住家すまがと爲せる雲濱に、伴れ添ふ妻は憂事うれしを、さしも忍べど朝夕の、細き煙も立てかねし、つらさを歌に洩らしける。

樵せうりおきし檐のきのつま木も焚き果て、拾ふ木の葉の積る間ぞなき

折しも西郷隆盛の、訪れけるを雲濱は、迎へ入れてぞ古壘、繁る浮世の荒波を、いためる上に請じつゝ、こゝに初めて対面を、遂げていたくも喜べり。やよ客人きやくじんをもてなせと、物の蔭にて命ずれば、妻は莞爾わんじやくと打笑みて、その懐に入れ行きし、おのが祕藏の笄かすがいを、酒に換へてぞ來りける。隆盛流石にそれと知り、身の貧しさ



を物とせぬ、志士の心を温き、酒に酌みつゝ人妻の、操もこゝに味はひて、世に頼母しき交りを、結びけるこそ床しけれ。

あくれば安政元年の九月中旬、ロシヤの軍艦、大阪灣に闖入し、通商條約結べと迫りつゝ、砲火浴せん擬勢に、上下うろたへ騒ぐ有様は、鼎の沸くにも似たりけり。斯くと聞くより雲濱は、異國人の威嚇をば、恐れて港開きなば、神の堅めし日の本も、遂には醜の夷等に、滅ぼされんは必定なり。いで大阪へ馳せ行きて、國の危急を救はんと、思ひ定めし敷島の、大和心ぞ勇ましき。されど益、襲ひ來る、貧しさ骨を刺す如き、それさへあるに勞の、病の床に臥す妻と、生まれて日數淺き兒が、涸れたる母の乳房をば、哺みもあへず啼き叫ぶ、聲には流石雲濱も、情の絆断ちかねて、腸絞るうき涙、妻には見せじ見られじと、暫し面をそむけけり。軀て心を取直し、やよ我が妻よ今は是れ、我が日本の危ふさは、げに累卵の如くなり。時も時とて生憎や、病める汝と此の兒とを、後に殘して行く我を、いと

情無しと思はんも、國の爲には是非もなし。されば今より浪速にぞ、急ぎ旅立つ心ぞと、いと餘儀なげに申しけり。妻は哀れや辛うじて、重き頭をもたげつゝ、とても斯くても現世には、永らふまじき我が生命、固より覺悟候ぞ、心残さず疾く行きて、天晴 大君の御爲に、盡し給へと答へける。聲は枯野の蟋蟀、限り知らるゝ身なりけり。健氣の答聞けば尙、胸も張り裂く憂き思ひ、強ひて隠して彼に斯くと、言ひ慰めて益荒雄が、赤き心を壁の面に、書き留めたる筆の跡

妻臥病牀兒叫飢、挺身直欲當戎夷。

今朝死別與生別、唯有皇天后土知。

大厦欲支奈力微、此間可說小是非。

微臣效國區區意、憤激臨行拜帝闕。

兩刀腰にたばさみて、さらばとばかり雲濱が、今立ち出づる其の宿に、さつと吹き入る比叡おろし、身にしみけるか嬰兒の、けたましくも泣く聲を、あとにの



こして白雪の、降りしく道を津の國の、浪速路さしてぞ急ぎ行く。

皇國の御爲に、家も妻子も打捨て、赤き心を盡くす身の、間もなく哀れや其

の妻は、朝の露と消え失せつ。己も終に囚はれて、あへなき最後を遂げにけり。

されど日本明らか、治まる御代の礎を、築き上げたる功績の、高き譽は名に

負へる、其の梅が香と諸共に、萬代迄も薫るらん。く。 (葛生桂雨)

梅田信子

樵り置きしのきのつまぎもたきはて、拾ふ木の葉のつもる間ぞなき

返歌

梅田雲濱

事足らぬ住居なれども餘りありわれを慰む君あればこそ

梅田雲濱

君が代を思ふ心の一筋にわが身ありとも思はざりけり

たとへ身はいづくの里にくらすとも赤き心はいかでおとらむ

久坂秋湖

要港控上國

豈容黠虜窺

方夷舶闖入

妻病兒叫飢

大劍起應募

國難安遲疑

賊遁志乃蹟

詞賦鬼神悲

嗟公固圍斃

頽厦孰能支

雖則斃固圍

忠魂護皇基



## 川瀬幸

川瀬幸子は彦根藩の醫師飯島三太夫の女むすめなるが、幼よりして池田法眼ほうげん恭雄に養はれ川瀬定を婿とす。人と爲り沈著和順にして夫に仕へ慎み深し。されど心さま雄々しく氣力あること男子に譲らず。體軀また肥大、一見して女丈夫と知らる。よく夫を助け諸事に周旋し、當時志士の出入する者皆心服せしとかや。ある夜、強盜二人戸を破つて押入りしに、定は家にあらざりしかば、婢僕恐れて潜ひそみ匿るに、幸子神色自若として、直に薙刀かち押取りて立出でしにぞ、賊その勢にや恐れけん、初の氣色に似もやらず、忽ちに逃げ失せける。

尊皇攘夷に盡くしたる夫定が捕はれし折、新撰組の隊士佐野某等數十人、尾花川の宅に踏込み、「汝が夫定は白河越にて捕へたり。汝も是より召連れ行かん。」と

言ふ。幸子少しも驚く色なく、「さらば御召に従ふべけれど、婦人の嗜みなれば、衣服を改むる間しばし待ちたまはれ。」と奥の間に入りけるが、出て來る様なきにぞ、隊士怪しみ押入る。見れば、時事に關係のふみども一つかねにして火中に投げ入れ、懷劍もて自ら喉のどを貫き居り、未だ息絶えざりしかど、隊士もその心の剛なるにあきれ、其のまゝ手を空しくしていとやかや。婢僕等さま／＼介抱なしつれど、六月の廿六日といふに、つひに創癒えずして果てぬ。(殉難稿録)



税所敦子

嗚呼、税所刀自逝きぬ。我が無二の友たりし掌侍正五位税所敦子君逝きぬ。忠孝慈貞なりし君が前半生の行状は鹿兒島士民の普く知る所、其の後半生の名譽は輦轂の下に隠れなし。然れども、前後に通じて能く之を知悉せるは蓋し正風ならん。正風が歌によりて始めて君と相見しは、君が齡三十に垂んとせし時にして、正風が歳十九の頃なりき。相見しは歌に依ると雖も、仰ぎ慕ひしは君が高節に依れり。

君は正風と同藩にして京都に勤務せし税所篤之氏の繼室となり、嬰兒を懐にして不幸にも夫に訣れたり。

嗚呼、君は京都に生まれ、京都に成長し、京都にて結婚したる優美艷麗なる婦人なりき。當時鹿兒島の風習たるや、同郷人の外は餘所者として之を賤しみ、其の姑の如きも京女の新に來りて同居する事を快しとせざりしにも拘らず、君は正當の理に循ひ、自ら奮ひて遼遠殆ど外國の想ある鹿兒島に歸りて其の姑に事へき。嗚呼尋常の女子ならんか、夫の携へ歸らんとするもなほ難色あらん。否、離婚をも乞ふなるべし。君が己に克つ勇氣に富み、志操の秀拔なりし事は、之を以ても知らる。況んや京都より齋しし衣服・調度の美なるものは、擧げて之を前妻の出にして鹿兒島に在りし女に與へ、身には粗敝を纏ひ、日夜老いたる姑を看護し、其の酒を嗜むを見て、手づから下物を調理して口腹に適せしめしかば、曾て君と同居するをだに厭ひ嫌ひたりし姑は、未だ月を重ねずして忽ち君を杖・柱とも憑むに至れり。

國君順聖公之を聞き、世子の保傅とし、親しく行爲を觀察して、大いに喜びて曰く、「吾、人を得たり。」と。世子夭す。君悲歎に堪へず、自刃して殉ぜんとす。



姑取縋りて泣きて曰く、「我今御身を失はば、何を楽しみてか、此の世に生き残るべき。」と。君これが爲に止りぬ。

正風嘗て君に就きて歌談を聴く。訪ふ毎に一婢ありて君が傍を離れず。また正風が詠草を返附せらるゝ毎に、必ず正風が母若しくは姉に宛てて送らる。當時正風迂疎にして其の何の故たるを解せざりき。後に思へば、嫌疑を遠ざくる用意の周到なりしなりけり。嗚呼、忠孝慈貞誰か之に加へん。後、久光公の女光蘭夫人近衛忠房公に嫁せらるゝや、君扨して東上して老女となり、下僚を遇すること慈愛を極めたりき。明治八年に至りて坤宮女流の人材を徴し給ふ。正風薦むるに君を以てす。君、順聖公の恩に感激し、近衛家を去るに忍びず。正風説くに大義名分を以てして、君始めて命を奉ぜり。爾來兩陛下御文學の諸務を掌り、御製・御歌の拜寫を始め、同僚・宮女の爲に百事の質疑に應ずるまで、日夜安息するに違あらず。君もと蒲柳の質、然も公事に服しては毫も攝養を意とせず。往年大いに病む

所ありき。天皇陛下君が年老いて勤勉の過度なるを憐み、家居して適意に出仕せしめんとし給ひ、特に正風をして内旨を傳へしめ給ひしが、君安んずる事能はず、平素厭嫌せし牛乳を服して氣力を養ひき。癒ゆるに及びて宮中に入り、鞅掌すること故の如し。

嗚呼、君が八百年以來たゞ一人の女文豪たりし事は、世人皆これを知る。君夙く三寶に歸し、慈善を好むこと飲食よりも甚だしく、我が彰善會の起るや、尤も熱心なる賛助者として金員を寄附せらるること數なりき。君去んぬる一月五日、正風が病床を訪ひて告げて曰く、「明年七十七、謂はゆる喜字の齡たらんとす。聊か自ら壽すべし。」と。正風大いに之を贊し、爲に盛大なる宴を張り、朝野の詞藻を蒐集せんと期したりしを、今は遂に全く畫餅となりぬ。

正風今かくの如く忠孝慈貞なりし無二の友を喪ひ、身病褥に横たはりて葬場に會することをだに得ざるは、何等の慘ぞ、何等の痛ぞ。豈慟哭せざるを得んや。



病を助めて此の誅を草し、兒元彦をして代讀せしむ。嗚呼、哀しいかな。

(高崎正風)

新世のかぜになびけどくれ竹の千代のいろこそかはらざりけれ

君が代を祈るまことはゆふだすきかけぬさきより神やうくらむ

朝なあさなおなじ山より出づる日の影もあらたに見ゆる今日かな

大庭の松のはやしのふかければむれるたづのかずもしられず

税所教子

## 乃木大將の夫人

乃木大將夫人が鹿兒島市の湯地家に呱呱の聲をあげた頃は、尊皇攘夷の運動が火花を散らしてゐた。夫人の父定之は、薩藩の奥醫師を勤めてはゐたが、薄祿の身で、六疊、三疊、二疊の三間限りの家に、九人の家族が起居するといふ有様であつた。夫人は三人の兄、三人の姉をもつ七人目の末子であつた。父定之は西郷隆盛、大久保利通等と志を同じくして、國事に奔走し、留守勝であつた。母の天伊子は病床に臥してゐたから、家事萬端姉達の手に委されてゐた。「自分の事は自分で始末する。」といふ湯地家の掟がある。夫人は十歳の頃既に身の廻り一切のことは勿論、稚兒齠までも自分で結上げるのであつた。「湯地のお七様を見習へ。」とは近所の母達の聲であつた。



長兄の定基が螢雪の功空しからず、藩から拔擢されて米國に留學を命ぜられることになり、湯地家に春がめぐつて來た。夫人は寺子屋に通ひ、女大學を教へられ、十二歳の頃には已に孝經や中庸等を讀むやうになつた。偶、明治四年定基が歸朝し、一家を擧げて東京に移り住むことになつてからは、麴町平河町の女學校に入學し、うるはしい天稟を磨かれた。就中彩管に高雅の氣品を表して、師匠を驚かすことしばしばであつた。

乃木家に嫁いでからは、將軍の母堂に心を碎いて孝養をつくし、將軍を助けて奉公の誠を盡された。勝典、保典二兒の教育は、夫人が専ら之に當られた。即ち武士の精神を養ふを第一とし、剛健な身體を鍛へるのを第二とし、諸般の學識を得るのを第三として、眞心を籠めて教育されたのである。有名な乃木家の麥飯辨當は、儉約といふよりは、寧ろ戰場に臨んで困苦に耐へんが爲の平素の鍛錬であつた。勝典が陸軍少尉に任官した年の誕生祝に、將軍は平素愛誦してやまなかつ

た松陰先生の士規七則を自ら手寫して贈り、大に士道を勵まされた。かくの如くして、あの立派な二人の令息が育てられたのである。

明治三十七八年戦役が起つて、乃木將軍は第三軍を統帥して、難攻不落の旅順を攻略され、勝典、保典二兒も從軍された。然るにその年の五月廿八日の南山の激戦に、勝典中尉は名譽の戦死を遂げられた。涙のかわく間もないその年の暮つ方、爾靈山の攻撃に、保典少尉も亦國に殉ぜられたのである。夫人の胸中はそも如何であつたらう。併し豫て覺悟の上の事であるとして、「御上の御用に相立ち、よき死所を得たのは何よりで御座います。」と、少しも歎く色を見せられなかつた。「三つの棺が揃はねば葬儀は出さぬやう。」との將軍の覺悟のほども偲ばれて、武人の妻のけなげさは、全く涙なしには語られないことである。

畏くも 常宮昌子内親王周宮房子内親王兩殿下には深く御感動遊ばれ、御自ら御歌をしたゝめ給うて御下賜になつた。



常宮昌子内親王御歌

身をすて、君と國とにつくしたるわがつかはもの、いさを高しも

周宮房子内親王御歌

ものゝふの立てしいさは日の本の國のほまれとなりけるかな

將軍に代つて之を拜受した夫人は、定めて感激措く能はぬものがあつたらう。

日露の戦役は我が國の勝利に歸し、四海波靜かになつた。昭憲皇太后は功勞者を新宿御苑に召され、その勞をねぎらひ給うた。特に乃木大將夫人をお召になり、懇に御下問あらせられ、御慰めの御言葉を賜つた。家門の面目これに過ぎるものはない。

夫人は極めて質實勤勉な方であつた。平生物見遊山などは少しもせられず、儀式などの特別な場合の外には、一切絹物を身に著けられなかつた。かの西那須野の別荘に居られた時は、いつも田畑へ出て、農夫を指揮せられるは勿論の事、自

身でも鋤鎌を執つて働かれた。食時頃訪問の客があれば、夫人自ら豆腐汁に鰹の鹽焼きといふやうな料理を拵へて、饗應されるのが例であつた。「人様が來られたとて、急に變つた旨い料理を注文するのは馳走にならぬ。すべて身分相應な物を自身に拵へて出すのが眞の馳走である。」との姑御の教を守られたのである。而も前掛やうの物を不斷著の上に纏ひ、かひなくしく自ら膳まで座敷に運ばれたので、誰でも夫人の心盡くしに感ぜぬものはなかつたといふ。

こゝに夫人の西那須野生活に於ける會計日誌の一部をあげると、

明治三十三年第十月分

入高 金貳圓參拾錢五厘、 但九月廿三日四圓也受取り致候分残り

一、金六拾貳圓九拾六錢二厘五毛、 東京宅より送り吳候分

出高

十月 四日



一、金貳拾六錢 玉砂糖五百目  
 一、金七錢 おはちふた直し

同 五日

一、金四拾五錢 切手葉かき共

同 八日

一、金拾錢 まき紙

一、金壹錢 静子やうじ

一、金貳拾四錢五厘 東京よりぬか四俵送り参り候分手間代

同 十七日

一、金貳拾五圓貳拾錢 長谷川おいね様御子供他人様に御えん付御さかな料、

東京迄上候汽車代、衣物、乳代として

同 廿四日

一、金壹圓五拾五錢 石油壹箱

一、金貳拾六錢 赤砂糖五百目

一、金五錢六厘 まつち

一、金七錢四厘 ちり紙二帖

一、金貳錢 ふのり

同 廿五日

一、金六拾八錢 白かうぢ

一、金壹圓八拾貳錢 酒三升、しやうちう壹升代共

一、金八錢 しほ

一、金四圓八拾四錢貳厘五毛 地稅、野稅共納致候分

一、金五圓也 正吉手間代

一、金貳錢五厘 使しやぼん



同 廿六日

一、金拾 錢 あぶらあげ

同 廿八日

一、金五圓也 下女井上しん、長の暇つかはし候に付心付

一、金貳圓也 同二ヶ月分給金

一、金壹圓五拾錢 同反物一反

一、金八圓也 あき取り入に付手間人代

惣々 五拾七圓參拾四錢貳厘五毛也

入高金より差引残り

一、金七圓九拾貳錢五厘也 第十一月へまはす分

このやうに、毎日の收支は細大漏らさず、丁寧に記入されてゐて、夫人の質素儉約の生活が眼に睹るやうである。こゝに見遁してならぬ記録は、夫人が十七日

に親戚の長谷川氏の結婚祝にとて、立派なものを贈られてゐること、廿八日下女井上しんに暇をつかはす際、心付として金五圓を贈られてゐること、如何に夫人が慈悲深く、情誼に厚い方であつたか、その一端が窺はれる。乃木將軍が嘗て恩賜金を賜はつた際、命じて十數個の金時計を製作せしめられ、これを悉く旅順攻圍の辛苦を共にした第三軍の幕僚に頒ち與へられ、特に失明された山岡熊治中佐には引打の金時計を贈られたといふが、この將軍のかけには、この夫人のあつたことを忘れてはならぬ。

明治四十五年九月十三日、長へに神去りまし、明治天皇大葬の夜、その大御跡を慕ひ奉つて、將軍は殉死せられた。夫人も亦自刃された。



辭世の歌

希典

三三〇

うつし世を神さりまし、大君のみあとしたひて我はゆくなり

静子

出でましてかへります日になしときくけふの御幸に逢ふぞかなしき

乃木將軍詩歌抄

朝な／＼をろがみまつる東の空にたふとき天つ日のかけ  
大君の御楯とならん身にしあればみがかざらめや日本心を  
身は老いぬよしつかるともすめらぎの大みめぐみにむくいざらめや  
うからやからことほぐけふの軍だちち、はままさばいかに嬉しき  
まがつびのあらびはあらじものゝふの劍の光くもらざりせば  
大君のへにこそ死なめ武士はうきてふことのかなどかあるべき

乃木將軍夫人より姪へ〔一節〕

此の節は寒氣強く候に付、暖く相成候はば宅へ御出かけなさるべく、その節よく御話申すべく候へ共、御前様には十分の御教育御受けなされ候ことに付、申すまでもなく候へ共、第一姑に於て少々無理御座候とも、嫁たるものは飽くまで孝道を盡し候は、古來より人たるものゝ義務に御座候。

何卒申すも愚に候へ共、女大學をよく／＼御覽相成度、若し御手許に御座なく候は、茲許に持合せ候ゆゑ、何時にても御用立て申すべく候。私共は二十年間も姑に仕へ候けいけんも御座候に付、よく／＼御話申度候。その内よく御分別の程肝要にぞんじ參らせ候。且又私病氣も大いによろしく、今日床あげ致候に付御安心下さるべく候。先は御返事まで。

早々かしこ

一月二十七日

(女子鑑)



## 杉野兵曹長の妻

軍神廣瀬中佐と共に、其の名高き杉野兵曹長は、三重縣河藝郡の人で、その妻は名をりうといつた。夫を亡くした時に彼の女は三十八歳であつた。

夫が壯烈な戦死を遂げ、勇名を世に謠はれることになつたので、彼の女の責任は重大となつた。夫の死後の名を汚すまいといふ覺悟、三兒の教育を仕終へて、夫のあとを繼がさうといふ決心、この二つの重荷は彼の女のかよわい双肩に落ちたのである。

彼の女は三兒を引きつれて、夫の故郷たる磯山に歸つた。家には年老いた夫の繼母がある上に、りう自身の繼母もつれてゐたのだから、家庭は中々複雑してゐた。一家六人の口が、僅かの遺族扶助料で支へられるものではない。複雑な家庭の中心となつて、圓滿に圓滿にと調和をとつて行く苦心、それからそれへと手内職、使ひ走り、収入の道をはかる氣配り、然も少しの間も目のはなせない三兒を相手に、女の細腕で、凡てを仕遂げようとするのだから、容易なことではなかつたのであつた。中でも、子供の教育には細いところまで注意を怠らなかつた。電燈の光のうすいところで、三人の子供を前に、亡くなつた父の功名談を語り聞かせては、軍人精神を小さい腦裡にうゑつけたのは、かうした彼の女の苦しい生活の、眞に僅かな餘暇からであつたのである。

明治四十年であつた。津市に共進會が開かれ、彼の女は志願して看守女に採用された。どこまでも獨立獨歩で、その本務を盡さうとしたのであつた。たま／＼某宮殿下が會場へ台臨あらせられた。この由申しあげるものがあつたと見えて、彼の女は長くも御前に召し出され、ありがたい御言葉を頂いて、勇士の妻としての名譽を得た。この際殿下には夫の功績とつりあはぬその妻の落魄の現状をみそ



なはせられ、あはれに思召して、

「かうした勇士の妻を看守女たらしめるといふことは、勇士に對する禮ではない。何とか救助の方法はないものか。」

同情のあるお言葉を、お附添ひの人々にお洩しになつたのを、洩れ聞いた當時の縣立高等女學校長清水誠吾が聞いて感奮した。さうして當局と相談して、同校教員囑託に採用しようとしたが、意志の強い彼の女は、校長に感謝の意を表はしたけれども、決然としてこれを辭退した。

「私は教へらるべきもので、教ふべきものではありません。勿論御救助下さるありがたいお心からではありませうが、教員囑託といふ職は、私にとつては、あまりにも榮譽であります。その徳のないものが、かうした榮職に就いて、どうして良家の處女に顔が合はされませう。たとひそれが恩恵でありましても、私の良心が職につくことを許しません。」

彼の女はこの苦しい境遇に立ちながらも、辭退したのであつた。だが校長の好意は彼の女の精神上の刺戟となつた。わが身の修養不足に内省し、彼の女の向上の機運を促進したのであつた。校長の承認を得て、教員たるべき修養を志し、東京に出たのが四十一年四月、彼の女の四十二歳の時であつた。東京裁縫女學校に入つて修業した。もとより學資金のあらう筈はない。その上に養はねばならぬ二人の母がある。三人の子供が居る。彼の女は手内職として、足袋の裁縫で収入を得た。けれどもその工賃といつても、極めて少いのみだから、普通大抵の働では、これらの費用をみたすに足りない。

それが爲には徹夜もした。針の爲に指を痛め、足袋の裏の白地を、血で汚した事もあつた。年とつた身の、この苦しい修業も、三人の子供の爲だと思ふと、彼の女にとつては何等の苦痛も感じなかつたのであつた。こゝに一縷の光明を認め、わき目もふらずに進んだ。規定の教科を研究し終へて、事實上の教員の資格



を受けて歸り、専心生徒の教養に當つた。

其の後は、一層老母にかしづくと共に、我が子の成育に全力を傾けたが、いくばくもなく、老母は此の涙ぐましいりうの苦心と孝養に感謝しながら、歿したのであつた。三子も亦それ／＼成長し、此の母の意を受けて、長男次男は海軍兵學校に學んで帝國軍人となり、三男は高等商業學校を終へて實業界へ入つた。かくてりうは、こゝに全く亡夫の遺志を果し、女子としての本務を盡して、此の世を去つたのである。(村上 寛)

征夫家婦詞

征夫語家婦。死生不可知。欲慰泉下魂、但視襟中兒。

家婦語征夫。有身當殉國。君爲塞下土、妾作山頭石。(明、劉績)

息女に教訓す

一筆申しまゐらせ候。然れば、そもじ幾千代の色もかはらぬ常磐木の、枝を連ぬる御祝として、よそへ越し給ふべきこと、誠にめてたう覺えまゐらせ候。申すまでは候はねども、身持やさしく、心おとなしく、さゞれ石のいはほとなりて、苔のむすまで繁昌して、孫・子の末々までも、御榮え候やうにと、打願ひまゐらせ候まゝに、筆に任せて申しまゐらせ候。

第一、慈悲の心ありて人を憐み、蟲・獸の上までも露の情を懸け給ひ、おもては唯青柳の絲の風に靡くが如く、物やはらかにして、人の心をくみ知り、僻める心を押直し、御嗜なさるべく候。さて又、心の中は石や金よりも堅く、あだなる心をもち給はぬ事肝要にて候。「忠臣二君に仕へず、貞女兩夫に見えず。」とあれば、



くれぐれ此の理を朝夕心に懸け給ひ候はゞ、神や佛の御守もおはしますべく候。

第二、まれ人など御渡り候はん時、内に無念の事候とも、聊か其の氣色を露ほども見せず、何となく打向かひ、春は青柳・梅・櫻・鶯・雲雀、夏は卯の花・菖蒲・橘・杜鵑・螢、秋は月・紅葉・霧・蟲・鹿、冬は雪・霜・霰・鶯・鴨・鷹、何れも其の折に觸れたる物語などして、懇に取りはやし給ふべく候。さりとして、年若き人の餘り睦ましげなるも、外目如何あるべき。唯何となくなぞらへて、とかくしのぎなきやうに、愛々しく候はん事こそあらまほしく候へ。

第三、召使ふ人の疎略にて、何事も思ふやうになく候とも、しのびやかにさとし言をもいひ聞かせ給ふべく候。それをも聞入れず候はゞ、責め誠めもあるべく候。さりとして、主などの聞かせ給ふ處にては口惜しく候。如何にみめ委うるはしき兒・女房なりとも、腹を立てたる顔は見にくきものにて候。しかも若き人、聲高に怒り候體、あさましく候。さて、さとし言をも聴くまじきものと思ひ給は

ゞ、里へ返し候はゞ、さのみ苦勞もあるまじく候。男も女も、あまり短氣に候うては、難も出來、召使はれ候者も、よそへ悪しきやうに名を立て、後には逃去るものにて候。

吉野なるなつみの川の川淀に鴨ぞ鳴くなる山蔭にして  
とよめる歌の心は、吉野の川は早く候。鴨は水の上に住むものなれども、餘り早き處には住み難く、川淀にて水の淀む處に遊ぶとなり。況んや人間の烈しき處にはながらへ難く候。

第四、夫婦の間、高きも低きも、睦まじく候はん事こそ、よその聞えもよろしく、心にくうも侍らぬ。たとひ幾千代を送りたまふとも、聊かも主に見落されぬやうに、朝夕嗜み候はんには、いよいよ千秋萬歳を保ち給ふべく候。偕又、無念の事をも、さのみ思ふべからず。たゞ世の有様をつらくと見て、心をものどやかに過し給ひ候はゞ、行末好き事のみにてあるべく候。歌に、



事足らぬ世をな恨みそ鴨の足の短くてこそ浮ぶ瀬もあれ  
さて又、心に掛けて習ふべきは筆の道にて候。いかなる位高き人中にても、お  
めずしてしとやかに書きなしたるは、いとけだかく見ゆるものにて候。上にも下  
つ方にも、無手に候はゞ不自由なるのみかは、其の身も賤しく成りさがるもの  
にて候。われ人の用に立ちなんものは第一鳥の跡なりと、或ふみにも見え候まゝ、  
常々御稽古ありたく候。殊更和歌は家のものなれば、申すに及ばず候へども、尋  
常にけだかく、四季に應じて御よみあるべく候。男も女も、萬づにつけて身持心  
遣ひ肝要に候。善きが上にも善きやうに願ひまゐらせ候。

餘り山鳥の尾の長々しく、書きつらね參らせ候。猶重ね々御祝の數々申し承  
り候べく候。めでたくかしこ。(烏丸光廣)

## 婦人の内助

婦人の努むべきことは何であるか。一口にいへば、それは内助である。家庭に  
於てはその内部を整頓するのが婦人の務であり、國家に於ても、その内容を充實  
させるのが婦人の働である。これは婦人に最も適した、而して、婦人でなければ  
できぬ仕事である。婦人が各種の職業に就き、今まで男子の職業になつてゐた仕  
事が段々婦人に開放されることは結構であるが、一般の婦人の天分たる仕事とし  
ては、この内助を措いて外にないと考へる。

それについて思ひ起すのは、先頃亡くなられた土肥慶藏先生の事である。先生  
は、唯醫學博士として偉かつたばかりでなく、人格は固より、文學方面の見識に  
於ても實に立派な方であつたが、還曆の御祝の時に、先生の徳を慕つてゐる人達



が先生の鑄像を作つて、それを博士邸の庭に建てた。その除幕式に私も参列したが、その胸像の下に先生と奥様が並んで立つて居られる。その前へ發起人總代を初として、参列の名士が、かはるがはる出て祝辭を述べ、土肥先生の功績を稱へる演説をされた。私は、それを聽いて、今更ながら偉い先生だと感じたのであるが、演説者が、皆先生のみを褒稱へて、目の前に並んで立つて居られる奥様の事を少しもいはない。この次の人がいふだらうと思つてゐても誰もいはない。私は何となく物足らぬ氣持がしてゐた。ところが、最後に立つたのが當時の駐日ドイツ大使ゾルフ博士であつた。博士は非常な雄辯家である。ドイツ語演説であつたが、實に立派な祝辭であつた。ゾルフ博士は、他の人々と同じく、先づ土肥博士の業績を十分に賞揚したが、更に言葉を改めて、土肥博士が斯く學徳共に大成されたのは、博士の人格と努力とによる事勿論だが、併し、それは博士一人の力ではない、博士夫人の内助によつてである。我輩はこゝに博士夫人に絶大の敬意を

表する、斯う述べたのである。私は、その一言を聽いて、先刻から胸に溜めておいた溜飲が一度に下つたやうな氣持がした。殊に私が面白く思つたのは、ドイツ語演説中にゾルフ博士が特に「ナイジヨ」と日本語を挿んだことである。多分この内助といふ言葉にちやんと當る外國語がないのであらう。勿論西洋婦人も内助をする。併し、内助は日本婦人の特長たる美德である。土肥博士夫人がその好典型であるのを、却つて日本人が氣がつかず、外國人たるゾルフ大使に指摘されたのである。誠に内助は日本婦人の特長である。私はこの特長が益、發揮されんことを切望する。而して、私がそれをいふのは、必ずしも今まで世間でいはれたのと同じ意味ではない。もつと強い意味である。普通一般の考へ方では、婦人自身も内助といふことを單に家庭内の手傳仕事に過ぎぬやうに思ひ、その眞價値を十分に自覺自重してゐない。而して、男子は又、婦人の内助につき十分な感謝と尊敬とを拂つてゐない。私はそれを豫々遺憾に思つてゐた。然るに、ゾルフ大使は、



内助が婦人の本分であり、成功が夫妻協力の結果なることを明言したのであつて、私がそれを聽いて溜飲が下つたのは、その日その席の溜飲が下つただけではないのである。

内助は確に家庭の仕事である。併しながら、同時に國家の仕事であり、社會の仕事なのである。我々男子は、從來偉さうに國家・社會の事を男だけの力でやつてゐる様に思つてゐたが、それは大變な間違で、國家・社會は男と女とて組立ててゐるのである。男女で片棒づつかつてゐるのであつて、男だけで背負つてゐる國家でもなければ、女だけで背負つてゐる社會でもない。それ故、婦人が更に一層自覺して、内助なることが頗る大切な仕事であるといふことを考へねばならぬと同時に、又、男子は婦人の内助が如何に有力であるかを考へ、婦人内助の力によつて我々はこの日本を背負つて立つことができるのである事を、十分に認識し、尊敬し、且、感謝せねばならぬと思ふ。然らば、今日日本婦人のなすべき内

助の仕事は何か。先づ以て家庭の美化・淨化である。今日の世の中は實に殺風景である。毎日の新聞を見ても、いやな事ばかり目につく。家庭にも種々の悲劇があり、社會には忌まはしい事件が續出する。何とかして世の中をこの殺風景から救ひ、この醜い世の中を本當の人の世らしい美しい世の中にしたと思ふ。而して、人生美化・淨化の一番の適任者は婦人である。今日のこの殺風景を救ふものは、日本婦人が古來もち傳へたる優雅の婦徳より外にはないのである。

日本は元來極めて優美な國だつた筈である。然るに、だんだん進歩發展するにつれて、人間の心の美しさが次第に喪はれて行くやうに思はれるのは、誠に遺憾な次第である。人或はこれを物質文明の弊といふ。私はさういひたくない。精神文明が物質文明に伴なはぬ弊といひたい。人間がこゝまで進んで來たのは物質文明のお蔭である。この驚歎すべき物質文明を逆戻りさすべきではない。益、進展せしむべきである。物質文明も亦人間の驚くべき精神力の發現である。その精神



力を更に一層精神文明の方に働かせ、精神文明が物質文明に並行するのみならず、それを指導するやうにありたいと思ふ。必ずしも、物質文明が男の仕事で、精神文明が女の仕事だとはいはない。併し、精神文明の振興は婦人に最も適する仕事であるから、婦人は主としてこの方面に力を注がれたい。即ち、私が特に日本婦人に期待するのは、婦人の美徳による國家社會の淨化・美化である。而して、家庭が集つて國家社會を成すのであるから、國家社會を淨化し美化せんには、先づ家庭を淨化し美化せねばならぬ。

我が國の家庭は昔から美しいものであつた。萬葉集に、

憶良らは今はまからむ子泣くらむそのかの母も吾を待つらむぞ

といふ山上憶良の歌がある。私の妻と直接にはずに子供のお母さんと呼んだ所に、我が國の家庭の親しみがあらはれてゐる。日本の家庭では、夫が外で一日働き「吾を待つらむぞ」と急いで歸つて來ると、家事にいそしんでゐた妻がきげんの

よい子供の手をひいて笑顔で出迎へる。この日本婦人の内助、これが決して軽いことではないのであつて、これあるが故に我が國は永久であり、盛大であるのだと思ふ。

萬葉集の中に今一つ夫婦の情愛をよんだ大變よい歌がある。讀人不知で、歌の内容から見ても身分の低い人の歌と思ふが、夫婦が歌で問答してゐるのであつて、先づ妻が夫に長歌で、

つぎねふ 山城道を 他夫の 馬より行くに 己夫の 歩

より行けば 見る毎に 哭のみし泣かゆ そこ思ふに 心し  
痛し たらちねの 母が形見と 吾が持てる まそみ鏡に  
蜻蛉領巾 負ひなめ持ちて 馬買へわが夫

とよみかけてゐる。山越えの道を、よその夫は馬に乗つて行くのに、うちの夫は歩いて行くので、見てゐる妻の身として、聲を上げて泣きたくなる、思つただけ



でも胸が痛い。どうかして馬に乗せて上げたいと思ふけれども、家貧にして何の貯もない。何をがたと考へたところ、こゝに一面の鏡がある。當時としては貴重品、況んや鏡は女の魂であり、更にその上母親の遺物といふのだから、自分に取つては命から二番目の大切な品であるが、これを提供しませう。それでも足りぬかも知れないから、私の大事な蜻蛉の羽根のやうに透いたこの肩掛も差出しませう。この二品を取揃へて持つて行つて、それで馬をお買ひなさい。我が夫よ。といふのである。實に眞情の籠つたよい歌であつて、日本の妻が己を空しくして夫を思ふ貞節は昔からこの通りだつたのである。山内一豊夫人の話は有名であり、貞女の鑑とされてゐるが、しかし、それは一豊夫人の專賣特許ではない。千年の昔既に立派な先例があつたのである。而して、一豊夫人の場合には一豊は夫人が鏡の函から出した金で馬を買つたのであつて、これ亦妻の折角の志を無にしないことと結構だが、萬葉集の夫は妻の差出した鏡と肩掛を受けなかつた。

馬買はば 妹徒ならむ よしゑやし 石は踏むとも 吾は二人行かむ

といふ短歌で斷つた。そなたの志は嬉しいが、私ばかり馬に乗つて、そなたを歩かせる譯には行かぬ。えいまゝよ、馬を買ふことはやめにしよう。たとひ険しい石道を踏むとも、我々二人は手に手を取つて、一所に歩いて行かうぞ。といふのである。これ亦歌として秀逸であるのみならず、自分さへよければといふ我儘を捨てて、夫婦同體の實意を示したところ、誠に奥ゆかしい限である。私は日本婦人が萬葉集以來引續き、かの妻と同じ氣持であることを疑はぬが、更に日本の男たちに萬葉集の夫の歌をよく味はつて貰ひたい。

扱て、私は右の歌の「石は踏むとも」の一句を殊に意味深く思ふ。人生行路難、どの様な困難が起るかわからぬが、夫婦相寄り相扶けて、如何なる困難をも踏越えて行かう。といふのであつて、實に頼もしい立派な覺悟である。而して、私はこの夫の歌の下の句を、單に夫婦の間のみならず、國民一般に當てはめたいと思



ふ。即ち我が國今日の非常時に處し、國難を打開する爲には、國民全體が一致團結し、「石は踏むとも」九千萬人「共に行かむ」の覺悟を以て進む外はないのである。九千萬人の一半は男子であり、一半は婦人である。萬葉の夫婦が各、己を空しくして相提携した如く、國民全體としても、男子と婦人とが、それぞれその本分を全くして、相扶け相伴なひ、如何なる險難をも踏破り、正義を指して眞直に進みたいものである。

妻たる事と並んで、大切な婦人の本分は母たる事である。婦人が母としての本分を盡くすか否かは、次の時代の人類が善くなるか悪くなるか、將來の日本が盛になるか衰へるかの岐れ目である。勿論、父親も重きをなすが、朝起きてから、夜寝るまで、引續き子供に接觸してゐるのは母親であるから、母親が善いか悪いかは、直接に子供の善い悪いに關係する。それ故、婦人が母親としての任務の大切な事を十分に自覺せねばならぬと同時に、男子は又婦人の母親たる地位を尊重す

べきである。

斯様に、妻たること母たることが婦人の本分であつて、歴史上賢婦人・女丈夫といはれた人が同時に良妻・賢母であつた例は澤山あらうが、時には賢婦人・女丈夫にして妻とし母としては落第のものもないではない。その適例は頼朝の夫人政子である。政子は所謂尼將軍として天下の政治を左右したのであつて、賢婦人であり、女丈夫であるには相違ない。しかし、家庭婦人としては果してどうであつたか。その子たる源實朝の歌に、

物いはぬ四方のけだものすらだにもあはれなるかなや親の子を思ふといふのがある。言葉も解せぬ野山の獸さへも、親の子を思ふ情はあれ程までに切なるものよ。といふのである。その歌の裏には次のやうな氣持が痛切深刻に現れてゐる。禽獸でさへも親は子を思ふのに、母上はどうして我々に對して母たる愛情をもたれないのか、實に情ない悲しいことだ。といふのである。實朝は又



いとほしや見るに涙もとまらず親もなき子の母をたづぬる

と歌つた。誠に人生最大不幸の一つは、親なきこと、又親があつても親に愛して貰へぬことである。殊に母の愛は子に取つて何物にも替へ難く貴重である。實朝に歌はれた孤兒も「母よ、母よ。」と泣いた。實朝自身も、位人臣を極めながら、母の愛なきが故に泣いた。母の愛は實に大切である。單にその子を人とならしめる爲に大切であるのみならず、次の日本を作り上げる國家的大事業のために大切なのである。即ち、婦人は母として先づ愛情がなければならぬ。單に賢婦人たるのみでは足りない。併し又、愛情だけではいけない。本當に物の道理がわからねばならぬ。子が少し成長すると母親は忽ちその話相手・相談相手になれなくなる。母と子が別世界に住み、子の方でもあたまから「お母さんには解らない。」ときめこんで、母親に寄りつかぬやうになる。實に淋しく悲しいことではないか。故に母親は愛情がなければならぬが、又見識がなければならぬ。子を愛するのみでは

足らぬ。子に尊敬されねばならぬ。子が母を愛慕し尊敬し、心の中を打明けて相談する様でなくてはならぬ。我が國の婦人は愛情に於ては缺ける所がない。併し盲目の愛ではいけない。子を敬服させるに足るだけの見識を伴つた愛情でなければ、本當に母親として本分を全くする事ができない。それには我が國の婦人はまだく大いに修養を積まねばならぬと思ふ。今一奮發して從來の美點を益、發揮すると同時に、その不足缺陷を遺憾なく充實されたいものである。男子も亦さらに修養を積むべきこと勿論であるが、斯くして一層完成せられたる日本男子と日本婦人とが、所謂「石は踏むとも共に行かむ」の大決心を以て、相扶け相補つて、家庭を築き國家を擔ふならば、非常時何かあらん、國難何するものぞ。徒に非常時國難來を叫んで、周章興奮する必要はない。たゞ男女各自その本分を盡くさんのみである。

斯くして我々は男女心を併せ、一致團結して我が日本國を守立てて行かねばな



らぬのであるが、もしそこに確乎たる中心があれば、一致團結は最も力強いものになる。而して、我が國民一致團結の唯一無二なる最も力強い中心點が皇室であらせられることは多言を須ひぬ。今一度實朝の歌を引けば、

山は裂け海はあせなむ世なりとも君に二心われあらめやも

我々日本國民は、平常時といはず非常時といはず、この忠誠心を以て終始すること勿論である。實朝の歌に又、

大海の磯もとゞろに寄する浪われてくだけで裂けて散るかも

といふのがある。打寄せる大波の力強さを詠ずると同時に、その怒濤が岩に當つて碎け散るその大磐石の巍然たるところを歌つたもので、正しく今日の日本の姿である。我が日本は今や世界の大海原に大磐石の如く屹立してゐる。狂瀾怒濤が後からく押寄せて來ても、碎け裂けて散つてしまふ。何とも心強い限である。併し、斯くあらんが爲には、我々が本當に心をひきしめて、強い所は強く、優し

い所は優しく、男と女とがそれ／＼その特長を發揮して、清く美しき社會を築き上げねばならぬ。而して、その根本は即ち家庭を清く美しくする事であつて、その大責任は婦人にかゝつてゐるのである。(穂積重遠)

あごの浦に船のりすらむをとめらが珠裳のすそにしほみつらむか

柿本人麿

我が背子はいづくゆくらむ沖つ藻の名張の山を今日か越ゆらむ

常麻真人麿の妻



## 日本の家庭と西洋の家庭

我が國の家庭と西洋の家庭とは、どういふ違があるであらうか。西洋でも、昔は血統を重んじ、また祖先の後を絶さぬ様に、養子をしてそれを續けるといふ風が、ローマ時代には行はれてゐたが、その後キリスト教などがはいつたので、種々の變化を來し、今日西洋の人が家庭を作るのは、全く夫婦が幸福の生活をする事を大目的とする様になり、決して祖先の祀を絶さぬ様にするとか、家の血統を續けるとかいふ様な事が目的ではない。男女が一定の年齢に達すると、結婚して親の家から分れ、新に家を持つ。それは男女の秩序を正し、互の幸福を希ふ爲であつて、我が國の家庭の様な意味をもつてゐるのではない。

それならば、我が國の家庭とはどういふものかと言ふと、今日ではそれに就いての觀念が明らかでない様になつて來たが、元來我が國の家は、唯形のある建物を言ふのではなくて、無形の精神、即ち形のない祖先傳來の精神を傳へ、さうしてその後を絶さぬ様にし、またその祭祀を續けるのが、我が國に於ける家の大目的となつてゐる。それ故、血統の絶える事を何とも思はず、また祖先の墳墓がどうならうとも、また歴代の家族の位牌がどうならうとも、誰も構はないといふ様な事は、我が國風では非常に悲しむべき事、また不徳義の事と考へられてゐるのである。要するに我が國の家庭は、祖先の祭祀を絶さぬ様にするのが骨子となつてゐる。故にたとひ一軒の住家がなくても、その血統の人が存在して居りさへすれば、天涯萬里どこへ行つても、歴代の祖先の精神がその人一人によつて代表され、その人が祖先傳來の血統を承け、その家に關する一切の事を、その人自ら引受けてゐるといふ事になる。故に家を持つといふ事には、自分の爲ではなくて、祖先から傳へられた精神を失はぬ様にし、またそれを益、發展させて行く大切な務



が存するのである。随つて、其所には全く宗教的意味がはいつてあると言つてよいのである。我が國の家庭は、この様に自然に歴史的に發達して來たので、別に理論上から考へて、ことさらに定めたわけではない。西洋では、これ等の事には注意を拂はず、夫婦が中心となり、その幸福が主要となつてゐる事は前に述べた通りである。我が國でも、勿論夫婦の幸福に注意を拂ふけれども、それよりは一層大切な事として、祖先の祭祀を續けて行く事に努めるのである。

さて、これを單に歴史的に自然に進んで來たといふ點から観るのでなしに、一體家庭はいかにあるべきかといふ事を人の道として考へてみると、家庭には三つの目的がなくてはならぬ。第一、過去にわたつて言ふと、祖先崇敬である。抑、家を持つ以上は、その由つて來た所を忘れてはならぬ。祖先を崇敬し、祖先の祭祀を絶さぬ事は、西洋でこそ重んじないにしても、人の道として當然存しなくてはならない事である。しかし、また唯さうやつて過去の事ばかりを大切にし、これ

にのみあこがれてゐては、將來向上進歩する事が出來ないから、どうしても現在をも考へなければならぬ。現在とは、即ち男女の秩序を正し、夫婦の幸福を進める事である。これは家庭の目的の一として大切な事であるが、しかし、またその事だけで満足すべきではない。何となれば、家庭を作れば必ず子供の生れる事を豫想せねばならぬ。然るに若しも、唯現在の夫婦さへ幸福であればよい、子供などはどうしても構はぬといふ事なら、却つて自分たちも幸福を得られず、子供もまた不幸になつて來るのであるから、どうしても未來をも考へねばならぬ。即ち子孫の教養を家庭の目的としなければならぬ。かう考へて來ると、家庭には過去、現在、未來に互つて目的を置かなければならぬ事が分る。從來の我が國の様に過去を重んじ、祖先の祭祀のみを圖るのは、却つて祖先の爲にならぬ事ともなる。昔の支那の二十四孝にある間違つた孝行の思想が我が國にはいつて來て、親に事へる爲には、子供があつては邪魔になつていけないから、その子供を埋めて



なきものにして、その後十分親に事へようとしたといふ話が教訓となつてゐたが、これは甚だ誤つた考である。元來老人に事へるのは、祖先に事へると同じ事であるが、この話の孝行の仕方の様なのは、過去の事ばかりを考へて、未來の事を度外視した考である。未來の事を考へてするのが、却つて祖先の精神を傳承する事となり、また祖先から傳へて來た家を繁榮させて行く事になるのである。故にこの事實を忘れずに、子供の教養に力を盡し、現在の家をよく齊へ、夫婦仲よく暮して行けば、祖先がどのくらゐ喜ばれるか分らないのである。是に於て、先づ過去の祖先の事を忘れないと同時に、一方には夫婦和合し、子孫の教育によく努める事が大切である。故に將來の家庭は、日本に限らず、どこに於ても、右に述べた様になつて來るのが當然である。子供の教育の上から觀ても、西洋の様に、唯一般に現在の事のみが中心になつてゐるのは、完全な家庭としての條件ではない。また我が國の從來の様に、夫婦、親子の愛情などの一切のものを犠牲にして

も、唯祖先の祀を絶しさへしなければよいといふのも誤つた考である。その爲に男女の秩序を亂したりする事も、往々出來たのである。どうしても過去、現在、未來の三つの目的が、そろつて實現されて行く事が、家庭の理想でなければならぬ。(高島平三郎)

ますらをの屍草むす荒野らに咲きこそ匂へ大和なでして 伴 林 光 平

よしや身はいづこの浦に沈むとも魂は都の空に留めむ 仙 石 貞 雄



樂しき家風

墨子といふ文に、「安居なきにあらず、我安心なきなり。」とあり。まことにひさかたの天の下、あらがねの土の上、決して廣からざるにはあらざれど、若し人道を離れて生存せんには、身を容るべきところなからん。随ひて人生の快樂なかるべし。女子は二様の世界に住むものなり。即ち此の住める世界の外に、また一家の内に一天地を作るべきものなり。此の一家の天地は小なりとはいへ、樂しき家風を作らんには、其の精神は無限に逍遙し得て、幸福こよなかるべし。

人は霞たなびく春の朝、木の葉散る秋の夕、互に限なく精神を吐露して、其の嬉しさ悲しさ、また、あらまほしきこと、あらずもがなのことなどを陸み語りするばかり樂しきはなし。されど、人、名利のみを求め、今日の知人明日の仇敵なら

んも知りがたき、所謂物いへば唇寒き秋風の吹く世には、かゝる樂しみはなすによしなし。たゞ女道を守り、良人より深く愛せらるゝ妻のみは、其の夫と共にかゝる樂しみをなし得べし。古歌に

大船のおもひたのめる君ゆゑにつくす心は惜しけくもなし

とあり。果して斯かる心づくしの妻ならずば、誠の樂しみを味はふこと難からんか。

おのれ歐陽修の瀧岡阡表といふ文章を讀む毎に、未だ涙の流るゝを覺えざることなし。抑、修は宋代の文豪・大才なり。されど、母の教なかりせば、凡夫となりて終りたるかも知るべからず。其の修を教へしことを見るに、曰く、「汝が父は吏となりて廉なりき。且俸祿薄きに、自ら儉約して貧人に施すこと多かりしをもて、死にし時毫末だに餘財なかりき。たゞ汝が自力を以て出世せんことを望み給ひしなり。汝いそしみ勵めよや。また汝が父は其の亡き母を祭る毎に、涕泣して



いふやう、『母君存命の時は、恒に貧しうして孝養足らざりき。今は餘りあるものを。』と。また汝が父判官たりし時、なほ嬰兒たりし汝を回顧していふやう、『あはれ、人誰か生を願はざらん。されど、今や法のため死ぬべきもの多し。』と。歎きけり。其の心、仁に厚きこと斯くの如し。汝も父に似よかし云々。』と。宜なり、修の非凡の人となりしことや。果して天下の母たる女子、斯かる心をもて賢子を育てんか、其の樂しみ譬へんに物なかるべし。謂ふ勿れ、女子に樂しみなしと。

其の他老年の親を安んじ、兄弟姉妹と親しみ、婢僕は恩徳に感じて命のまゝに勤むるなど、凡べて和氣霽然たる樂しき家風を作り、傍より見るものこれを欽慕し、聞く人これを感服して、そが家の園生の草木は一層芳しく、犬猫さへも平和に慣れて樂しむめりと思はるゝばかりの家風を作るべし。斯かる家風は女子みづから春風の如き徳性を具へ、勞を厭はず、苦を忍び、輕快に家事を果すにあらずば能はじ。元來、良人の酒色に耽るは先天的の性質によることもあらん。され

ど、たま／＼妻の爲すこと言ふこと其の意に適はず、隨ひて眞面目に世務を勉勵することを欲せざるより、放蕩に流れせめし例もあり。なほ女子の訓戒を守らず、婢僕の命令を奉ぜざるは、女子の不幸なり。あはれ、女子の一顰一笑は忽にすべからず。

樂しき家風を作らんと誤了して華奢に流るゝ勿れ。華奢は永遠なること能はずして、平和・團欒の仇なり。樂しき家風は却りて節儉にして且質實なる生活をなす人にあらざればなし得ず。

凡そ女子は入るを量りて出し、恒に分限を離るべからず。梅花は質實なり。故にさかり久し。櫻花は華美なり。故に散ること速かなり。(三輪田眞佐子)



### 松 下 禪 尼

相模の守時頼の母は、松下禪尼とぞ申しける。守を入れ申さるゝことありけるに、すゝけたる明障子のやぶればかりを、禪尼手づから、小刀して切廻しつゝ張られければ、兄の城の介義景、その日の經營して候ひけるが、「賜はりて、某男に張らせ候はむ。さやうの事に心得たるものに候。」と申されければ、「その男、尼が細工によもまさり侍らじ。」とて、なほ一間づつ張られけるを、義景、「みなを張りかへ候はむは、遙かにたやすく候べし。まだらに候も見苦しくや。」と重ねて申されければ、「尼も、後は、さわく〜と張りかへむと思へども、今日ばかりはわざとかくてあるべきなり。『ものは、やぶれたる所ばかりを修理して用ふることぞ。』と、若き人に見ならはせて、心づけむためなり。」と申されける。いとありがたかりけり。

りけり。

世を治むる道、儉約を本とす。女性なれども、聖人の心に通へり。天下を保つほどの人を子にてもたれける。まことにたゞ人にはあらざりけるとぞ。(徒然草)

六憎とて憎むべきもの六あり。その詞に、持ちて高ぶるほど憎きはなく、害を見ずして物識り顔するほど憎きはなく、人に物をやりて恩にさせるほど憎きはなく、吝きほど憎きはなく、慾ふかき程憎きはなく、人をそねむほど憎きはなし。

柳 里 恭



## 原總右衛門の母

播州赤穂の城主淺野内匠頭長矩、元祿十四年の春三月勅使下向の際、殿中に於て吉良上野介義央を刃傷に及びける罪科によりて自盡を命ぜられ、采地を沒收せられぬ。是の故に、其の老臣大石内藏助良雄は原總右衛門元辰等と相謀りて、復讐を企てたり。

爾後大石は京都に住し、原は猶留りて赤穂の城下に住し、時々密便を交換し、書狀を以て互の意思を通じたりけるが、一日總右衛門は老母の傍に侍して、さまざまの物語の序に言ひけるは、「此の度餘儀無き用事の出で來て、京都へ上らんと存じ候が、事によりては江戸迄罷り越すやも計り難く、若し左様の事にも相成り候はば、一月餘は日を費し申すべし。留守中は定めて御徒然にて、御不自由の程

もさこそと推量り參らすれども、暫時身の暇を賜ひ候へ。」といふ。

母はつくづくと我が子の顔を打ちまもり居たりしが、「いやいや、汝一度此處を去りて江戸表へ罷り越すならば、よも再びは歸り來らじ。是今生の別れなるべし。」といはるゝに、總右衛門打驚きて、如何答へんとたゆたふ程に、母は重ねて、「汝驚くこと勿れ、そも武士の家に生まれて、譜代恩顧の主の爲に身を致すは誠に至當の事ならずや。古語に曰く、『君辱めらるゝ時は臣死す。』と。君に忠なるは親に孝なるぞ。必ず母に心を残さずして、一日も早く亡君の爲に修羅の妄執を晴し奉り、忠義の道に潔く相果てんこそ母のこよなき望なれ。何のたゆたふ事かは。」と、勵まされたる母の詞に、總右衛門は覺えず感涙に咽び、「誠は早くより大石殿と心を合はせて、内々復讐の支度を整へ候へども、事の漏れんことを恐れて、父母・妻子にも語るまじとの神文誓詞を仕り候故に、今日まで母上にも御明し申さざりしを、何卒御免し下されかし。」と言ひければ、母大いに悦びて、急ぎ旅立



の用意ども取整へてぞ出し立てける。

さて、原は山科なる大石が家に往きて見るに、近き頃より良雄は病床に在りて、うめき居たりければ、いたく驚き憂へて、心を盡くして看病しけるに、病は思ひしよりも頓に怠りがたになりぬ。今は心安しと思ふものから、猶關東へ下らんことは覺束なく、暫時かくて保養あるべきことと、人々いひ合ひけり。總右衛門も、げに然るべしと同意して、さらば我も今一度立歸りて母の安否を問ひ來んとて、更に赤穂へ取つて返し、しかくと告げけるに、母も始は何事か打案じ居たるが、漸くに氣色直りて、さらば久々にて、諸共に一獻酌まんと、手づから酒肴を調じて子にも勧め、我もまゐりて、宵過ぐる頃までいと心地よげに打語らひて、明日を契りて各、臥所に入りぬ。

かくて、夜明け、日は昇れども、母の起きて出で來らざるに、總右衛門いぶかしてみて、下婢をして、やをら其の寢所を伺はしめけり。下婢は寢所に入るや否や、あつと叫びて轉び出でぬ。原驚きて入りて見れば、こはそも如何に、母は、懷劍もて喉をさし貫きて自盡して、うつ伏しに臥し居たり。餘りの事に涙も出でず、騒ぐ心を強ひて押鎮めて、物やあると、あたりを見れば、果してその枕邊に一封の書あり。披きて讀めば、かくぞ書かれたる。

一筆申残しまゐらせ候。常々孝心深きことは詞にも述べ盡くし難し。殊更、母の事を思ひて、故郷へ立歸るなどの心づかひ、我が身にとりては如何ばかり悦び入り候へども、まづ討入といはん時、ふと母の身の上を思ひ出し給ふならば、進む勇氣も忽ち挫けて、敵に内兜を見られ給はんか。これ全く母の存命故と存じ候まゝ、惜しからぬ老の命、今宵先立ち申候。是も子を愛する道にもあらんと、女心の一筋に思ひきはめたるにて候。此の上は後に心残りなく、吉良殿は亡君の仇、母の敵と思ひつめて、討入り給ふものならば、鋭き手柄を致され候はんと、安堵致し參らせ候。何事も最期を急ぎ、草々申残し候。



原 總 右 衛 門 殿

總右衛門は此の遺書を見て、心弱く立歸りしことを後悔すれども、今は何の甲斐あるべきにあらねばと、ますく志を勵まして、直ちに京に取つて返しぬ。かくて吉良家討入の夜は比類無き手柄をあらはしけり。

まことに、此の母にして此の子ありとは、此等の事をやいふべき。あはれ我が子を勵まさんとして、自ら死を急ぎし母の心は、いとをしくも、また傷ましき限なりかし。(下田歌子)

本 居 宣 長 の 母

「偉人の後には賢い母がある。」といふ事實を最もよく示してゐる例は、徳川時代の諸學者の傳に多くこれを見るが、中でも最も著しいのは、わが本居宣長の母刀自であらう。自分はここに宣長の母勝子刀自について些か語つて見よう。

勝子は寶永二年四月十四日、伊勢國松阪新町の村田孫兵衛こよあき豐商の四女として生まれ、享保十三年、二十四歳で小津三四右衛門定利の妻となつて、二男二女を生んだ。その長男が宣長である。元文五年三十六歳の時に夫におくれ、明和五年正月朔日、六十四歳で世を去つた。

小津家は松阪の舊家で、江戸に出て木綿問屋を営んでゐた。宣長の曾祖父・祖父相次いで商業が大いに榮え、父三四右衛門之をうけついで熱心に業務に従つた



が、手代のために誤られて資産を失ひ、三四右衛門は四十六歳の七月に江戸大傳馬町の店で病歿した。

三四右衛門の死は、いふまでもなく小津家即ち本居家にとつては大災厄であつた。養嗣子定治は江戸にあつたが、それもまた數年の後に世を去つた。遺産としては僅かに四百兩あつたが、それも親戚に保管されて、僅かにその利子が給與されるだけであつた。この間にあつて、勝子は、一家の生計を維持すると共に、宣長を始め子女の教育を全うしなければならなかつた。尋常の婦人ならば殆ど手足を出す術も知らないで、茫然自失すべき窮境であつたのである。ところが、勝子は些かの狼狽もせず、細かな思慮と明敏な判断とを以て、雄々しくも一家の經營に當つた。

こゝに特に勝子の大先見と稱すべきは、その宣長に對する明察と、時宜を得たその教育の態度とである。このことがあつて、始めて我が宣長をして宣長とならせたもので、勝子の賢明は、よく本居一家を危急の間に全うするを得させたばかりでなく、更にまた、本居宣長といふ一大學者を生ぜさせて、日本の國家及び日本の學界に、未曾有の寄與をなさせたのである。賢母の功績もまた偉大であるといふべきである。

何をか勝子の明察といふ。それは、彼女が、宣長は到底商人となるべきものではないといふ事を見抜いて、彼をして學者とならせ、以てその天分を成させようとし、而も純然たる學者の生活の困難な事を知つて、生活の元手を得る爲に、醫師とならせようとした事である。よくその子を見抜いた炯眼と共に、また生計の點にも十分に心を用ひた勝子の先見と、悠々思慮を盡くしたその態度とは、眞に及び易からずとすべきではないか。

寶曆二年、宣長が二十三歳の春、勝子は宣長を京都に留學させた。宣長は京都に上つて、まづ堀景山に就いて儒學を學び、後に武川幸順に醫を學び、五年四箇



月間留つた。この五年餘の留學が、やがて宣長の學問の上にも、また生活のためにも基礎となつて、宣長をして後年の宣長とならせたことは、宣長の傳に於ける明白な事實である。この五年間餘、宣長をして何等後顧の憂がなく、また都會生活にありがちな數多の誘惑にも陥らずに、十分勉強することを得させたことは、全く勝子の苦心と激勵との結果であつた。

さうでなくてさへ、困苦の中から宣長を留學させて、學費を支辨し、又、一家の經濟を立てて行く勝子の苦心は、決して一通りではなかつた。勝子は或は家財を賣り、或は親戚から借錢をなし、苦心慘憺してこれを處理した。而も、彼女はその子に對して、例へば、會ひたい情をも忍んで歸郷を延ばさせようとしたやうに、もとより節約を要求こそはしたれ、必要の費用に對しては、常に事を缺かさずこれを給して、決して愚痴がましいことをいはなかつた。併し、自分の苦心は或程度まで打明けて我が子を誡めた。さうして、宣長の日常生活につき、また勉

強については、絶えず激勵し、その上、宣長の雙肩にかゝつてゐる家運挽回の大責任についても、自覺させることを忘れなかつた。或は大酒を戒め、或は食物に用心し、或は寢冷に氣を付けるなどは、勿論一般の母親氣質であらうが、我が子に對するその激勵と啓發との態度に至つては、眞に大なる教育の妙諦を得たものといはなければならぬ。勝子が宣長に與へた書翰の一つに、

「倅、何かと心づけ候へども、入用多く苦勞致し申し候。随分随分無事にて心強く思ひ、外の儀に心移し申さず、唯々一筋に醫者の方心掛け、申すまでは無く候へども、人間心一筋を強く道々を專一に成さるべく候。此所をそもじ取損ひ取外し申され候はば、いつもく申す通り、一人の母此の世より迷ひ申すべく候。其の上、父母・先祖の跡の所よくく心にしめ、專一に守り申さるべく候。人々そもじ事褒め居り申し候へば、此所取損ひ候はば、親の恥は申す様なく、大不孝と存じ候。」



とあるが如きは、この點に關して最も敬重すべき大文字である。

勝子が當時の斯様な賢慮と苦心とは、素より、俊秀の子である宣長に感應せずにはゐなかつたに相違ない。併し、當時勝子から送つた書翰は數十通も残つて居るのに、宣長から對へたものは遺憾ながら殆ど傳はつて居らぬ。随つて、勝子の心盡くしが、いかに宣長の心に反應したかは之を知り得ないが、併し、その反應の効果を明瞭に吾人に語る大なる事實がある。それは宣長の學者としての成功である。宣長をしてかやうな國學上の偉人とならせた素因は、多く之を勝子の人格に求めるべきである。宣長の學問と事業とを嘆美するにつけても、吾人は必ず勝子の賢明を忘れてはならぬ。

いかなる國、いかなる代にも、總べての方面に涉つて最も必要とするところのものは大人物である。さうして、大人物を生ぜさせるには、その母が賢明でなければならぬ。吾人は今に於て勝子を偲ぶ情が殊に切である。(佐々木信綱)

## 中江藤樹の母

雪ならば幾たび袖を拂はまし花の吹雪の滋賀の山越

それは彌生の春の頃、櫻狩して行く道の眺めも飽かぬ旅なれども、これは習はぬ冬の旅、花の吹雪のそれならで、霏々たる雪は路を没し、凜冽たる風は膚をつんざく。辛苦のうちに滋賀の山を打越ゆれば、滿目蕭條たる湖上の風景。辛崎の松は暮靄朦朧の間にかくれて、堅田に落つる雁の聲のみ寒く鳴きわたる。

見渡せば白雪皚々たる比良の峯、今より此の山路にかゝらば、山中にて日は暮れん。疲れし足の進み難きに、坂本の邊りにて宿を求めんかと、獨旅の少年は前路を睨んで、暫く湖畔に立ちたりしが、稍、ありて思ひ返し、彼の山を越ゆれば我が故郷。今一息にて母君の許に著くなるに、何とて空しく此處に留らん。夜に



でもあれ、朝にてもあれ、家に歸るを得ば疲れも厭はじ。いづく心を取直して、今宵の中に此の山を越えんものをと、再び足を踏みしめて、薄暗き山路へこそはかゝりけれ。

痛はしや藤太郎、母に逢ひたき一心より、踏みも習はぬ山路を、杖にすがりてたゞ一人、たどりくゞて行く道の、岩に躓き、木の根に倒れ、血さへ足より流れ出で、道の邊の雪を紅に染めながら、なほも心を勵まして、風雪の中を登り行く。やがて日は暮れたり。闇の夜ながら、雪明りに路は見ゆれど、彌増す寒さは骨に徹りて、手も足も凍るばかり。寂莫たる満山、耳に答ふるものとは、閉ぢし氷の下潜る細谷川の水の音、杉の枯葉を鳴らす風、或は積雪梢を壓して、枝折れ雪の落つる響など、かすかに物凄く聞えて、恐しとも悲しとも譬へんやうなし。斯かる難所と知りもせば、麓にて一夜を明かししものを、旅馴れぬ身の悲しさに、足に任せて此の深山路へかゝりしが、今は足疲れ身體凍りて、先へも出でられず、

後へも戻られず。藤太郎は進退谷まりて、半ば死せるものの如く、松の根方に打倒れたり。起きも得上らず、降る雪を、恨めしげに眺めてありけるが、腹は次第に饑を感じて、寒さは一入身に泌みわたり、何時しか眠るともなく死ぬともなく、前後も知らずなりにけり。

やゝありて耳許に人の呼ぶ聲。かすかに眼を開けば、身は辻堂の縁にあり。我を呼びしは年老いたる一人の僧なりけり。僧の傍には小牛の如き黒犬一頭、おとなしくひかへ居り、縁の前にはたき火僅かに残り。あはれ藤太郎は危くも凍死すべかりしを、幸に此の犬に捜し出され、此の老僧の情にて漸く助けられたりしなり。

x x x x x x

懐かしの故郷や。藤太郎は昔覚えし山川・草木を目の前に見て、忽ち足の疲れも打忘れ、路を急ぎて我が家の方へ向ひけり。夜は漸く明けたれども、雪天の寒



さに閉ぢられてや、道々の家はまだ多く起き出でず。彼の家は我が友の家なりけり。此の家には我に優しき老人ありきなどと、昔の事を想ひ出でて、そゞろにあはれを催しつゝ、しばらくにして我が家の前に來れり。

見れば、衡門舊に依つて立ちたれども、半ば雨に朽ちてまた昔日の觀に非ず。柱も傾げる所あり、築地も崩れたる所あり。前庭の古松、刈る人なければ、枝繁り、脩竹一叢、思ふままに根を延ばして、彼方此方に生え出でたる若竹は、雪に堪へざる風情あり。玄關の戸は未だ開かず。母人は未だ起き出で給はぬにやあらんと、築地の陰より内に入りて、勝手の方を見れば、車井の軋る音、さも寒げに聞えて、何人か水を汲めり。妻は確かに母なる人、藤太郎は忽ち胸塞がりぬ。昔はあまたの男女を召使ひて、勝手などに出でられしことなき母様が、此の雪の朝の寒空に、自ら車井戸の水を汲み給ふか、情なしと、湧き出づる涙止めあへず、急ぎ車井戸の側に駆け行きて、後より其の袂を惹き、

「母様、私が汲みませう。」

と涙ながらに取りすがる。

事の不意なるより、母なる人は驚きて振り返り、

「誰ぢや。おや、藤太郎。どうして此處へ。」

藤太郎は細き聲、

「はい、母様の御手助を致しに参りました。お話は後で申し上げますから、先づお家へお入り遊ばせ。あれ、お頭髮うつけに雪が……。」

と孝子の眞情、片時も母を此の雪中に立たしめざらんとす。母は車井戸の綱を確と握りしまゝ石の如く立てり。

「祖父様とても御一緒か。」

「いゝえ、唯獨りで……。」

母は聲を勵まし、



「祖父様が獨りそなたをお出しなされたか。」

「いゝえ、濟まない事とは思ひながら、祖父様には知らせずに参りました。」  
母は眉を揚げ、

「えつ、なぜそんな事を……。」

颯と吹き來る朝嵐に、地上の雪はくるくると捲き上げられて、横に二人の顔を撲つ。母はきつとして動かず。藤太郎は何事か言はんとして、顔を揚げしが、ふと母の足を眺めて、

「おや、御足が切れて血が……おゝ、これこそ輝かがやてくださいますか……。」

と俄に斷腸。母の疵を見るは、我が身の背に白刃を加へらるゝよりも痛はしき心地して、忽ち懷中よりかの靈藥を取出し、

「母様、これをつけて御覽遊ばせ。」

と足許に進み寄る。母は急に足を引きて怒の聲、

「足などはどうでもよい。なぜそなたが歸つたか、其の詳をお話しなさい。」

藤太郎は取付くすべもなし。

「然らば、家へ入りまして申し上げます。」

母は頭を振り、

「いゝえ、此處で聞きますせう。聞かない内は滅多に家へ入れません。」

藤太郎は、母を思ふ一心に、遙々歸り來りし次第を物語りぬ。母は我が子のやさしき心根に惹き入れられ、そゝろ涙に咽びしが、忽ち思ひ返しけん。わざと言葉を勵まして、

「これ藤太郎、そなたは此の母の言葉を忘れませんでしたか。そなたを祖父様にお頼みした時、一旦國を出たからは、天晴れ立派な人にならぬ中は、決して中途で歸るなど、あれほど堅く言ひ聞かせた事を忘れませんでしたか。此の母が難儀を忍ぶのも、唯そなたを立派な者にしたいばかり。立派な者にならないで、家に居て手



助をしてくれたとて、何のそれが嬉しからう。一人で来たものなら、一人で歸れぬ事はあるまい。母は再び會ひませぬ。其の足で直ぐ大洲へお歸りなさい。」餘りの事に藤太郎は黯然として言葉も出でず、力抜けして雪の上に踞きぬ。母は其の失望せる様子を見て、痛はしさ哀れさ胸に満ち、斯くまで我が身を思うて來りしものを、……百里の道の獨旅、定めて憂き事も辛き事も多かりしならん。せめて一日なりとも家に入れて、旅の疲れを休めませんかと、恩愛の情に心も亂れんとするを、忽ちにしてまた思ひ直し、なまなか弱き心を見せなば、修業の邪魔、獅子は子を千仞の谷に落すと聞くものを……。

「藤太郎、そなたは母の言ふ事がわかりませぬか。」  
と強くは叱れど聲は沾みぬ。

藤太郎は落つる涙を拭ひつゝ、頭を垂れしまゝ、かすかなる聲にて、  
「はい、わかりました。」

「それならば、今から歸りますか。」

藤太郎は悲しき聲、

「はい、歸ります。」

と素直に言ふ。母は素直に答へられては、なほさら腸のしほらるゝ思ひ。遂に堪へかねて忍び泣き、袖かみしめて聲を呑む。藤太郎は屹として立上れり。

「母様、此の藥は輝の妙藥で、世に得難い品、これ差上げたいと、わざ／＼持つて参りました物。これだけはお取りなされて下さりませ。」

と新谷にて得し妙藥を母の前に出す。母は快く、  
「おゝ、そなたの志、これだけは受けませう。」

と手に取らんとて下を向く。藤太郎は渡さんとして上を向く。見合はす顔、互の眼には涙一杯。

母は恥づかしく、じつと耐ふる心の苦しさ。子は堪へざりけん、藥を手より取



落してうつむけば、雪の上にほろほろと落つる涙。

雪はなほ霏々として寒風に飛べり。母が汲み置きし水を見れば、いつの間に張りけん、上は一面の薄氷となれり。藤太郎は遂に心を勵まして、泣くく我が家を立出でたり。見送る母、見返る子。満天の風雪、路悠々。(村井弦齋)

成尋法師入唐し侍りけるに母の詠める

唐土も天の下にぞありと聞く照る日の本を忘れざらなむ

## 頼山陽の母

山陽は通稱久太郎、諱は襄、子成と字した。二つの時兩親に抱かれて安藝の竹原に歸り、祖父享翁に初對面した。祖父は大に喜んで、小半紙に「忠孝」の二字を書いて、孫の守袋に入れてやつた。忠孝は山陽の一生の精神である。幼時父春水は江戸詰となつたから、主に母に育てられた。體質は虚弱であつたが、早熟で、年甫めて六歳、忽ち母に問うて曰く、「天は如何なる物ぞや」母曰く「旋轉止まず、彼の如きのみ」と。山陽遽に庭に下り、天を仰ぎ歎じて曰く、「不思議なるかな。」と。啼泣半時許。その觀察鋭敏、多感なることこの類であつた。かかる中に、江戸詰の父からは武者繪を送られた。それには義經八艘飛び、清正虎退治などもあつた。山陽はこれを見て喜び、又好んで歴史談を聽いた。これらが山陽が後に大



歴史家となつた刺戟であつたらう。九歳の時、「龍虎」の二大字を書して、菅茶山を感心せしめた。十歳の頃から、母が針仕事をしながら、行燈の傍で論語・孟子の句讀を授けたが、温習を餘りしないで、好んで軍記類を読んだ。

山陽は九歳の頃から、痲瘡に罹り、吐瀉病になり、又眼病にもなつた。それを母が一心に介抱して全快せしめた。つまり母が生みの親であり、又育ての親であつたのである。母は雅號を梅颯はくしといひ、春水と結婚の時からずつと日記をつけ、八十四歳で死ぬまでこれを續けた。その間には歌が詠んである。凡そ我が國の婦人て山陽の母ほど、まめに日記をつけた人はあるまい。山陽の文才は母に負ふところが多いのである。また山陽の生涯を知るには、梅颯日記をも見る必要がある。山陽は少年の時「立志論」を書き、「噫、男兒不學則已、學則當超群矣。」といひ、十三歳では有名な「十有三春秋、逝者已如水、天地無始終、人生有生、死、安得類古人、千載列青史。」といふ詩を作つた。

山陽は十八歳の時江戸に遊學し、柴野栗山から「通鑑綱目」を讀むやうに言つてやつたが、讀んだかと問はれたところ、「我は本箱にあらず、ただその大意を領するのみ。」と答へた。山陽は十七歳の頃から癪が強く、無言で氣重く、今いふ憂鬱性で狂氣のやうなこともあつた。これは往々天才にはあることである。二年程して江戸を去り、二十歳で結婚したが妻が氣に入らなかつた。二十一歳で京都に脱走したから、廣島から追手がかかつて連れて戻された。藩士の嫡男の脱走は重罪であるから、その罪を謝するため、廣島袋町の父春水の宅の門脇の粗末な建物の内に圍を造つて、山陽はそこに監禁、屏居せられること前後五年であつた。山陽は十五歳の時、蘇東坡の史論を讀んで、「天地の間此の如き喜ぶべき文あるか。」と嘆じ、東坡には終生私淑してゐた。山陽が座敷牢（藝藩の寛仁の處置を徳として、これを仁室と呼んだ）に居る間も、修史の初一念は牢乎として抜く能はざるものあり、日夜心血を傾注して、日本外史の著述を續けた。その間、山陽の脱藩した故をも



つて、他人から嫌忌、誤解、嘲笑を被つた中にあつて、母は一人我が子の眞價を認め、陰に陽に勞り侍いて、檻中の獅子を擁護して、その志業を成さしめたのである。

五年間足一步もこの居室を出でる自由を得なかつたから、参考の書物などは求めままに、母が取次いでやつた。梅鷗日記の享和二年十二月十日の條に、「仁室より著述物みせる。伊助より取次」とある。これが外史の底稿である。時に、山陽二十三歳、母の驚喜知るべきである。それで屏居五年の終りの頃には、「日本外史」の大著述も殆ど整稿を見るに至つた。外史の字數は三十萬一千一百餘であるが、後年「卅萬言皆帶血痕」と言つたのは、當時の精神の打込み方、慘憺たる苦心を述懐したものである。

青年時代の山陽は、今日でいへば、不良青年といはれるかも知れない行動もあつたので、人々にその扱ひをされたから、それきり見棄てられたら、持てあまし者

となつたかも知れないが、それを母が一人見込んで保護し、慰め勵まし、或は課題を與へて筆を執らしめ、危い道を踏み外さずに、長所を發揮せしめたので、母がなかつたら山陽はなかつたであらう。西洋にも、「世界が皆、子を見棄てても母が子に全世界になる。」といふ諺があるが、山陽の場合は確かにそれである。だから子供は見限るものではない。どんな子供にもどこかに長所はあるものだから、それを認め、それを伸ばすやうに勵ますべきである。今日不良少年だ、不良青年だといつて、一概に片づけ、見放してしまふのは間違ひである。かういふ者に、却つて或優れた才をもつてゐる者があるものである。山陽でも、人々からその扱ひを受け、誰も保護獎勵するものがなかつたら、「日本外史」も、「日本政記」も世に出ず、明治維新の大業を翼成した勤王の志士をも、あれまでに鼓舞激勵しなかつたであらう。

「日本外史」の初稿は二十八歳の時に成つたのであるが、これが世に出ることに



なつたのは、それから二十年の後、四十八歳の時であつた。

山陽は二十四歳で檻居を寛免せられ、廢嫡せられて、後、自由の身となり、三十歳、備後神邊かんまきの菅茶山の廉塾の塾頭となり、三十二歳、京都に上り、新町に塾を開き、後三本木に移つた。ここは山紫水明處と稱して今日も存して居る。

三十六歳、醫師小石元瑞の養女りえ(梨影)を妻とし、支峰、三樹の二男を生んだ。梨影は良妻で、山陽の死ぬまでよく山陽を勞はり侍き、又賢母であつた。

山陽は孝心の深い人で、京都から遠路郷里廣島に屢、父母を省し、三十五歳から五十二歳まで十一回に及んだ。文化十三年三十七歳の時父春水が歿した。喪に服すること三年、毎朝焚香泣拜、一年菜食した。危篤の報に接した時、山陽は莊子を講じてみたが、晝夜兼行廣島に歸つた。而も終に及ばず、以來終身また莊子を講じなかつた。

父亡き後は、母に仕へて至孝。屢、母を奉じて諸方に遊び、その心を慰めたこと

は、その詩文及び梅麴日記によく見る所である。文政二年三月には母を奉じて京都に上り、京見物をして嵐山に花を見、大和廻りをして吉野に花を賞した。

花は少し晩かつたが、母の喜ぶ顔に十分の春があつた。それから京都へ歸り、琵琶湖を遊覽して、母は大阪から陸路廣島へ歸つた。それから文政十年の春、母及び叔父杏坪入京、共に嵐山に遊び、又再び母の輿に侍して吉野山に遊んだ。この旅行の時には、各、詩や歌を作つて楽しみ、後の思ひ出とした。有名な十旬花月帖はその所産で、肉筆の詩歌が木版の帖となつて、今日も珍重せられてゐる。山陽は母が吉野の櫻を見て喜んだことを何よりの喜びとし、自分が宰相となつたよりもうれしいといつたといふ。

芳野にてよめる今様

襄

花よりあくるみ吉野の 春のあけほの見渡せば もろこし  
人も高麗人も やまと心になりぬべし



芳野にてよみける

梅 颯

まがひつる雲は色こそながめけれ花にうづむるみよしのの山  
見すててはかへりがたきをなかなかにちらんもよしやみよしのの山  
など數首の歌をよんでゐる。

文政十三年(五十歳)には父の十三回忌で第八回の歸省をなし、次で母に侍して上京、伊勢參宮をし、冬には箕面みづのに楓を觀て、母を廣島に送つて歸京した。又天保二年(五十二歳)には十一回目の歸省をして、母に侍して嚴島に遊んだ。山陽は二歳の時兩親に連れられて嚴島に詣つたが、五十年の後又母を奉じて來るので、感慨無量であつた。

これが母との最後の遊である。山陽は廣島に歸省すること十一回、母の輿に侍して再度吉野に花を見、三たび琵琶湖に遊び、湖上の觀月をもし、又十たび淀川を上下した。交通至便の今日でも、母に對してこれだけの事をする人は少なからう。

況やその不便の昔をや。至孝の人でなくては出來ないことである。

山陽は父春水の遺志を繼いで、二十九歳からの念願であつた「日本政記」の著述に、五十一歳から著手したのであるが、天保三年六月十二日咯血した。しかし山陽は「死生命あり。然れども我上に老母のあるあり、且志業未だ全く成らず。假令一の生理なきも、宜しく醫藥を加ふべきなり。」といつて、飲酒喫煙を禁じ、服藥治療に力めた。ところが七月二十五日に又大咯血をした。それで「吾に一腔の血あり、その色正に赤、その性熱云々」といふ有名な「患咯血」の歌を作り、史を閲して姦雄の天罰を遺るるを憤り、「遂に肺肝の裂くるを致す。」といつてゐる。その間にも執筆を續けた。即ちその文字は血で書いたのである。古今此の如き悲壯ともいふべき著述があらうか。かくて九月二十三日、未ひつじの刻から漸次危篤に陥り、暮六つ時、終に「日本政記」を草しつつ、忽ち左右を顧みて、「我將に假寢せん。」といひ、眼鏡をかけた儘筆を擱き、眠るが如く逝いたのである。時に年五十三



であつた。梨影の手紙には臨終の直前までも、「此方も口惜く候へ共、とても本復は出来難いと申され……誠につらい事にて、母に先立つ事、不孝と度々被申……」と見えてゐる。母の梅麴は子に後れる事十年、風疾に罹り、天保十四年十二月九日八十四歳の壽を以て歿した。

山陽には澤山の著書や詩文があるが、その最も有名なのは「日本外史」と「日本政記」である。この二書が勤皇の精神を鼓吹し、明治維新の大業を翼賛した功績は甚大である。爾來今日に至るまで、山陽の著書、詩文が國體を明徴にし、日本精神を發揚涵養せることは測るべからざるものがある。それで昭和六年秋、山陽の百年祭に當りては、畏くも贈正四位は從三位に陞敍せられ、郷里廣島を始め東京、その他の都市でも、その祭典が盛大に行はれ、記念展覽會が各所に催され、山陽の全集が發行せられ、同年十一月月上旬には廣島袋町の舊宅地に仁室（八疊に四疊半）を取入れて、立派な山陽記念館が建築せられた。（この山陽の居室は國家的史蹟

として同年九月三日文部大臣より指定せられた）「匹夫而爲百世之師、一言而爲天下之法。」とは、當に我が山陽をいつたものであらう。支那では古來「百世に廟食す。」といふことを、男子の理想としたが、山陽の如きがそれであらう。而してその山陽を生み、育て、大成せしめ、一生その力となり、生命となつたものは、その母梅麴女史靜子であつたのである。

靜子の父飯岡義齋が、春水が江戸詰の不在中、留守を預り、家を治める心得を娘に書き送つた手紙の中に、「りんりんとして、おかすべからざるのみさを立て立て立てすゑ、あつばれ手から、剛のものよ、賢女よ、義齋が子、彌太郎（春水）が妻、久太郎（山陽）が母よ、婦人のかがみよ、手本よと、ながき世までのわらひほまれのわかれを、わするまじきものなり。あなかしこ。」とある。

父義齋の教訓を身に體し、これを實行した山陽の母こそは、母の鑑として、山陽と共に、長き世までもその芳しき譽を傳へるであらう。（下田次郎）



## 橋本左内の母

景岳先生が藩主松平春嶽侯の懐刀となられ、二十七歳の若さで死なれても、幕末の奇才として、天下にその名を誦はるゝに至られたのは、固より天成の英質によることではあるが、此の風雛を玉成させた母堂の庭訓を忘れてはならぬ。

景岳先生が七八歳の頃、吉田東篁先生の塾から歸つて來られると、母堂は必ず自分の膝元へ呼び寄せて復習を命ぜられた。景岳先生は針仕事をしてゐられる母親の前に端然と座を正して、今日習つて來た「論語」や「大學」などをすらくと水の流れるやうに讀み下される。母堂は黙つてそれを聞いてゐられるが、一字でも間違ふと、膝元に置いてある一尺ばかりの木の棒を取るが早いか、ピシリと景岳先生の肩を打たれる。その打ち方がまた尋常一様でなく、良き子を育てる母

の一念で、岩も砕けよと打たれるので、流石の景岳先生も、目から火の出るやうな思で、時には餘りの痛さに堪へかねて、涙を落されたこともあつた。

景岳先生が、二十一歳になられて、始めて藩侯のお供をして、江戸に出られる時が來た。蛟龍は久しく池中の物ならず、今や雲雨を得て中天高く飛揚する時はなつた。いよゝゝ家を出られる時に、景岳先生は母の前に兩手をつかへ、

「左内もいよゝゝ君國の爲に命を獻げる秋が参りました。一度江戸に出てなば親しく孝養を盡くすことが出來ないのみか、生きて再び温顔を拜し得るや否やも心許なく存じます。どうぞ暑さにつけ寒さにつけ御身をおいとひ遊ばすやうに。」と景岳先生の聲は涙に曇つてゐた。母堂は一滴も涙を見せず、きつと景岳先生を見据ゑられて、

「そなたも既に二十一歳にも成つて見れば、武門の道に間違はあるまいが、今日より以後は、これを母と思ひ、幼き折からの訓を忘れるでないぞ。」



と、景岳先生の幼き時、肩を打たれた往年の棒を與へられた。

是れより幕末の麒麟兒、勤皇の先覺者橋本景岳の名は天下の人を驚かした。越前藩の家老鈴木主税が、かつて藤田東湖先生を訪うて、當代人材に乏しきを歎息した時、東湖先生は、

「貴藩に橋本景岳あり。彼實に當代の英傑にあらずや。」

と推稱された。また一代の英傑西郷南洲翁が景岳先生に敬服された話は餘りにも有名であるが、南洲翁が城山に討死された時、最後まで携へられたのは景岳先生の手紙であつたといふ。

その景岳先生が安政五年の戊午の大獄に捕へられ、翌六年に小塚原の刑場で斬に處せられた時、役人連が景岳先生の遺物を取調べたところ、其の懷の中から一尺あまりの小さな木の棒が出て來た。何も知らぬ役人連中は、それを見て不思議な顔をしてゐたが、誰一人棒の由來を知らう筈はなく、兎も角も先生の遺物として、これを一切取りまとめ、福井の橋本家に送りかへした。

こゝにおいてか知る、景岳先生はかつて母の打ち給うた棒を以て母の形見として一生肌身離さず、西に東に必ず携へて行かれたことを。あゝ、何といふ孝心であらうか。

子は還らず、棒のみひとり寂しく母の手に還る。その棒を見られた時に、流石は氣丈の母も、よゝどばかりに泣き伏されたといふ。

景岳先生が、獄中から母に送られた手紙が澤山あるが、その手紙のどれを見ても、捕へられたとも、獄中にあるとも一言もいはず、ただ私は無事であるから、御安心下さいと書かれてないものは一通もない。

母堂は景岳先生が死なれたといふことを傳へ聞かれて、先生から來た最後の手紙を先生の形見として、命を終らるるまで帯の間にしつかりと挟んで、いとしい我が子を心から抱いてゐられたと言ふことである。(雜賀鹿野)



獄中作

橋本左内

苦冤難洗恨難禁  
昨夜城中霜始隕

俯則悲傷仰則吟  
誰知松柏後凋心

二十六年如夢過

顧思平昔感滋多

天祥大節嘗心折

土屋猶吟正氣歌

黒井繁乃

年若き女の身にして夫に後るゝばかり悲しきはあらざるべし。しかもこの悲しみに堪ふるものはなほ世にあらん。鐵石の貞心、身を終ふるまでこれを潔うする者に至りては更に難かるべし。さるをよくこれを全うして、貧苦に撓まず艱難に挫けず、幼き孤兒をおふしたてて、家系の將に絶えなんとするを繼がしめし黒井繁乃の如きは、最も類稀なるべきなり。

繁乃は上杉氏の家臣黒井四郎左衛門の一人娘にして、文化元年七月出羽國米澤なる袋町に生まれき。七歳にして父を喪ひしかば、母の膝下に人となり、のち、同藩士湯野川某の三男なる源三郎を夫に迎へて家を嗣ぎぬ。文政六年七月、一子信藏を生みて家門の榮えいよゝまさらんとしけるに、げに禍福糾へる繩の如く、



同じき年の十一月、夫源三郎病の床にうち臥しけるが、やうやう重りゆきて、心こめたる看護のかひもなく、遂に歸らぬ旅にぞ出立ちける。繁乃はその時纔かに二十歳、よはひ一つの嬰兒を育むだにあるを、これに加へて頽齡の母はあり、ことに家、主人の二人まで引續きて世を早うしければ、おのづから食祿も減らされて、世の活計に事缺くことの多かりけるには、いかばかりわびしくも亦悲しかりけん。世の常の女なりせば、物狂はしうもなりぬべし。さるを繁乃は心を鎮めてよくこの歎に堪へ、あるは羽織の緒を組み町に賣り、あるは機織り絲繰りなどして、わづかの賃銀に換へ、よく母に事へ、子をいつくしむこと年重なりければ遠近の人々、こを聞きつたへて、ほめ感ぜぬものこそなかりけれ。

信藏、七歳になりぬ、繁乃、隣なる糟谷某といふ翁に就きて四書を學ばしむ。されど、その頃の藩士の女の習ひとて、面正しき學の道にも入り立たず、たゞ纔かに假名文字知れるばかりなるを恥ぢて、思へるやう、「子を賢からしめんとせば、

おのれ先づ賢からざるべからず。われ自ら文字に明らかならずして、いかでわが子の誤れるを正し、疑はしきを明らめ得べき。種しあらば岩にも松は生ふるものを、いでや今より學ばんも遅からじ。」とて、その後は信藏のものまなびに行く毎に、吾も亦隣家の窓のもとに立ちつゝ、漏れくる翁の聲のまに／＼、假名もて竊かに書きうつし、信藏の歸りきて復習する時、わが記したると引き較べて、「こゝはかく／＼改めよ。そこはしか／＼と讀まんぞ正しき。」と、絶えず傍にありて教へ導きしが、かくすること二年ばかり、終に四書をこと／＼く寫しはてたりとなん。「世の中に思あれども子を思ふ思にまさる思なきかな。」とか。子を思ふは人の親の常とはいひながら、かくばかり眞心もてその子をおふし立てしもの、思ふに世にはすくなかるべし。あはれ、今孟母ともたたふべきは、この繁乃なるかな。その後、信藏は藩の學校興讓館に入り、拮据勉勵して、學業大いに進み、十三歳になるまで、引續きて秀才の譽を擔ひければ、藩公いたくめて給ひて、黄金あ



また賜ひて賞せられき。これみな繁乃が力の致す所とぞいふべき。信藏ある時、母の記しし假名書の四書の、一字一句母が心血のこもれるものなるを、空しく蠹魚のすみかとなさんを惜しみて、記念としたまはらんことを請ひけるに、繁乃いふやう、「かく拙き筆の跡を遺しなば、なか／＼に後の物嗤ひとなりやせん。」といなみたれども、強ひて請ひとり、はしがきを添へて、うるはしく綴り合はせ、「國字四書」と名づけて永く子孫に傳へ、以て慈母の恵をとこしなへに忘れざるやうなしたりけり。かくて嘉永六年八月繁乃は病みて身まかりぬ。齡五十歳なりき。

繁乃若かりし程は容姿端麗にて、あてに美しかりけれど、夫に別れし悲しみと、老幼を扶くる物思と、貧しく足らぬ勝なる苦しさにて、いたく心神を勞したりけん。中年に至りては、はや毛髮ことごとく白く、齒などもほと／＼抜けはてたりとかや。その頃信藏は學業や、成りて、家は嗣ぎたりけれど、仕への道も年淺くて、未だ志を得るに至らざりければ、すぎはひの不自由もなほ前と異ならず、信藏

が當番のため、月にひとたび登城する時の紋服の如きも、止むを得ず、つねは質舗にあづけおきて、登城の日の近づけば、繁乃は二夜も三夜もまどろまでいそしみつゝ、とかくして錢まうけいでて、信藏に知れぬやうに償ひかへりて打著せたりとぞ。その程の心づかひ、げにいかばかりなりけん。されば繁乃の身まかりける時、信藏の悲しみはいはん方なく、かくばかり身を苦しめて、われをいつくしみ給ひし海山のなさけ、あはれいつの世にか忘るべきと、深く思ひしみければ、後、累進して重職に就き、町奉行となりて秩祿二百五十石を食み、戊辰の役には米澤藩の監軍として越後口に轉戦し、明治維新の後は米澤藩少參事に任ぜられ、さてのち辭して、藩の支封たる上杉子爵家の家令となりて、遂にその身を終へしまで、つねに母の艱苦に堪へし心を心として、自ら奉ずること極めて薄く、一生の間、絶えて煙草・茶・酒類を口にする事なく、家に慶事あるごとには、これぞ母のためものと、先づ國字四書を戴きて、厚くその恵を仰ぎ謝したりけりとなん。



古語に曰く、「言ふは易く行ふは難し。」と。百の言ありとも、一の行なくば、なにかひかあらん。言は行をまちてはじめて尊ければなり。世進み智開くるに従ひ、徒に言多くして行鈍きが習なるを、繁乃は言うて行はざるはなく、行ひて遂げざるはなし。三史・五經の道々しき教は受けざりけれど、おのづから聖賢の心をさとり得て、よく孝に、よく貞に、よく慈に、人の最も難しとする所に安んじて、玉となりて一生を全うしたり。その流風遺韻、まことに、世の人をして感奮興起せしむるものありぬべし。(吉田彌平)

世の中の塵も濁も流れては清きにかへる加茂の川波

太田垣蓮月

吹き拂ふ松の嵐のなかりせば雲に埋れん峰の古寺

荷田蒼生子

## 東郷元帥の母

赫々たる大勳績と神の如き大人格とを久遠の青史に輝かせる東郷元帥は、昭和九年五月三十日午前七時廣大無邊なる聖恩と全國民の涙ながらの祈願の中に永へに現世を去られた。まことや、精忠の権化であり、國家の至寶であつた東郷元帥の偉大さは、今更言ふまでもない事であるが、東郷元帥を知るには、まづその母堂を知らねばならない。

「平八どん、御奉公を大切にな。」

この一言を遺言として、明治三十四年四月十日の曉天、梅花芳しい一室に、愛兒、愛孫達に取繞られて、眠るが如く逝いた元帥母堂益子刀自が九十年の生涯は、尊くも又ゆかしいものであつた。



古今の歴史や史傳を繙いて見ると、偉人と賢母との關係を證據だてる事蹟は尠くないが、中でも東郷元帥と益子刀自の事ほど、この色彩の鮮かなのは稀であつて、刀自の爲人や言行を知つたなら、誰でもこの名婦の子に凡庸者が出よう筈はないと肯かれるであらう。

刀自は薩摩藩士堀與三左衛門の三女で、二十歳の時、同藩の士東郷吉左衛門實友に嫁した。まだうら若い身で嫁いて、刀自が覺悟の基礎となしたのは、眞心の二字であつて、これを唯一のお守として、何から何までまめ／＼しく立働いたので、一家はまことに和氣霽々たるものであつた。文武二道に達した上、清廉を以て鳴つてゐた實友は、やがて名君齊彬侯の知るところとなり、郡奉行、高奉行、御納戸奉行等の要職に擧げられ、一意公務に盡瘁し、家にある事さへ稀だつたので、家事は一切刀自に委せてゐた。随つて刀自は己が責任の重きを知り、過なかれと願ふの餘り、堅い信仰を持つやうになつたのである。

刀自は子福者で、四十一歳までに五男一女を擧げたが、三十六歳の時儲けた四男仲五郎實良こそ、後の東郷元帥その人である。

何とぞして、愛兒を品性の高潔な人間に育てあげたいものと、日夜心を碎いた刀自の苦心と努力とは並大抵のものではなかつた。例へば愛兒達が寢てゐる時、用事あつてその室を通られる際でも、決して頭の方は歩かず、必ずその足元の處を廻つて通る程であつた。

「この子供たちは、將來有爲の人物になる者だ。たとひ親でも、その頭上を踏むやうな事は、自然彼等を輕蔑する事になり、延いては彼等に自屈の念をも起させる事になるから、慎まねばならぬ。」と、家人等を戒めると共に、愛兒たちをして自重の念を起さしむる事に努めたのである。

この賢母に育まれて、仲五郎は健やかに生ひ立つて行つた。天性敏捷な仲五郎は、その智慧の發達にも恐しい程の閃きを見せた。十歳の時、彼は自分の敏捷さ



を試す爲に、或日田圃の中を流れる水際に立つて、小刀を揮つて、「えいつ。」と小鮒の群に切下しく、またたく中に數十匹を切つて得意満面だった。この事を隣人から聞いた刀自は、元帥を膝下に呼びつけ容を正して、

「武士は大敵を破つてこそ譽になれ、小魚を切る事など何の自慢になる。」とたしなめた。

明治十年の西南の變には東郷家の長男四郎兵衛實猗、三男莊九郎實次は薩軍に投じたが、實猗は負傷し、實次は戦死したので、戦友達は其の屍を毛布に包んで假埋葬をして置いた。戦後、これ等戦死者の死骸を發掘して、祖先の墓地に埋葬しようとして、工夫たちは實次の假埋葬の場所へ向つた。ところが刀自は工夫達を斥けて言ふには、

「愛兒の遺骸を鋤鍬の類に觸れさせたくない。」

と、他人の力もかりず、たゞ一人兩手で土を掘返し、最後まで掘り續けた

ので、終には指先は傷つき、血はほとばしり、見るからに痛々しかつたと、今でも郷里の人々の一つの話になつてゐる。かやうに烈しい性質ではあつたが、やがて後、元帥に夫人の輿入があり、自分は未亡人になられてからは、一家の事はすべて夫人任せとして、かりそめにも干渉がましい事はしなかつた。常に「善い妻となるのはもとより大切な事であるが、良い姑となるのは一層大切な事である。」と言つて、自身を省み、他を戒めてをられた。こんな風だったので、元帥夫人との間は他から羨まれる程和かで、家庭には朗かな笑が絶えなかつた。後元帥が浪速艦長として高陞號を撃沈し、まづ日清戦争の火蓋を切つて以來、連戦連勝、少將に昇任した上、常備艦隊司令官として、大功を建て、凱旋された時、刀自は我が子を迎へて上座に直し、

「これ皆、天皇陛下の御威光で、何とも申し上げやうはございませぬ。」

と、恭しく兩手を突いて挨拶されたので、さすがの元帥も感極つて平伏し、たゞ



はらくくと落涙されたといふ。

大正八年春、元帥が、東宮御學問所總裁として沼津御用邸に伺候した際、孝道について、私にかう語られた事がある。

「孝は百行の基といふ事は、時勢がいかに變遷しようとも、決して變らぬ道理である。孝はもとく親を慕ひ、親を大切に思ふ至情から出るものであるから、これが無いやうでは、忠節を盡くす事も、信義を守る事も、誠心誠意から出る筈はない。そればかりでなく、何事にも眞實が缺けるに相違ないから、よし一時の僥倖は得る事があつても、つまりは失敗に終るにきまつてゐる。自分は人物を観察するには、その親への仕へぶりを見るのが一番よいと思つてゐる。」

この談話の内容は決して新しい事ではないが、何事も實行の上でなくては口にしない元帥の言葉となると、其處に無限の價值を生じ、肅然として襟を正さざるを得ない。元帥は八十八の高齡に至るまで父母を慕うてをられた。をりにふれ、

話題が兩親の事に及ぶと、あの嚴しい顔を微笑に解かせて、小兒のやうに親の事どもを、重い口で、それからそれへと、語り續けられるのである。辭令を賜はり、または皇室から頂戴物などあつた時は、何をおいても先づ父母の靈前にこれを供へ「父上、母上、これを頂戴致しました。どうぞお喜び下さい。」

と、目前に父母在す如き面持と、優しい言葉とで報告されるのであつた。

元帥がてつ子夫人と結婚されたのは明治十四年二月の事で、當時元帥が三十五歳、海軍少佐で天城艦副長の職にあつた。てつ子夫人は鹿兒島の志士として有名な海江田信義の長女で、時に二十一歳、極めて温厚な謙遜深い人であつた。が、海軍軍人として、殆ど海上にあつて、家事を顧みる暇のない夫君をして、後顧の憂をなからしめたばかりか、貧しい家庭の經濟を切りもりして、暇々には母堂と力を合はせて、内職稼ぎにマツチ箱張りさへせられたといふ。質素を旨とし、無駄を省いて、麴町區上六番町に家附の土地を買受けられた。東郷坂と名附けられ



て、今では東京名所の一つとまで數へられる今の元帥邸がそれである。その時の引越し荷物は二つの柳行李と若干の臺所道具だけだったといふ。夫人の苦心の並大抵ではなかつたことが知られる。元帥はこのよき内助者を得られて、家庭に後顧の憂なく、君國の爲に盡くされたのであるが、婦人の忍従といふ事を何よりも重く見られたとみえ、私の四女が嫁いて行く際、告別に元帥を訪ね、將來の心得をお願ひしたのに對して、元帥から次のやうな懇な諭の御言葉を頂戴した。

「世の中といふものは、何事もさう思ひ通りにはゆかぬものだ。そこで堪忍といふことが大切になつてくる。殊に家庭の事は理窟では通らぬ場合が多い。それを一々理窟にはめようとする、破綻が生ずるから、堪忍第一と覺悟せねばならぬ。この節は、婦人方が大層強くなつて來たやうだから、堪忍等といふ事は時代遅れとして嫌はれるかも知れぬが、一度自分が人の妻となつて、家庭に直接の關係をもつやうになつたら、獨身の時には無暗に強がつてゐた者も、しみじみ思ひ當る事

があるだらう。さてその堪忍といふものは誠心から發する事が多いもので、先方の御兩親や御良人を大切に思はれたなら、自然堪忍強くなれるものだ。さうして幾久しく繁榮する事を望みます。」

元帥の言、まことに味ふべきである。(小笠原長生)

x x x x x

### 東郷元帥の歌

おろかなる心に盡す誠をばみそなはしてよ天地の神  
朝日影かゞやくまゝに空たかく聳ゆる嶺も色まさりけり  
よきを採りあしきをすて、身を竭す道こそ神の教なりけれ  
日の本の海にとゞろくかちどきはみいつかしこむ聲とこそ知れ



## 孟母

鄒、孟軻、三歲喪父、母仇氏、有賢德、其舍近墓、孟軻少嬉遊、爲墓  
 閒之事、孟母曰、「此非所以居子之地也。」乃去、舍市、傍其嬉戲、乃  
 買人街賣之事也。又曰、「此非所以居子之地也。」復徙、舍學宮之  
 傍、其嬉戲、乃設俎豆、揖讓進退。孟母曰、「真可以居吾子矣。」遂居  
 軻既長、出就外師、及學而歸、孟母問學所至、軻曰、「如舊。」孟母乃  
 以刀斷其機、曰、「汝中道而廢學、猶吾斷此機也。」軻懼、且夕勤學、  
 不息、受業、子思之門人、遂成大賢。(蒙求)

子の爲に三度となりをかへにける親の心もかしこかりけり

足代弘訓

## 母の教訓

日露戦争の時、第十一師團は愈々、滿洲へ向つて出征しようとして、兵隊が皆丸  
 龜で船に乘りました。知事を始として、郡長や村長や名譽職・有志家等が、見送  
 のため埠頭に集つて、盛に萬歳を唱へ、「御機嫌よう。」と口々に申しましたが、心  
 の中では、「嗚呼、これだけの人が幾人生きて還つて来るか知れぬ。」と、淋しい感  
 じを抱きながら、とにかく一同を勵ましておますと、其の時群集を掻分けて來た、  
 誠に粗末な著物を著て、冷飯草履を穿いて、背中に汚い風呂敷包を背負つた一人  
 の老婆がありました。「私は一言悴に言うておきたいことがあります。どうかも  
 う一度遇はして下さい。其のため遠い處から駆けつけて來たのです。」と言つて、  
 海岸に行つて、大聲を出して、「皆様の中に、私の悴の何某といふものが居ります



か。居れば一言いつて置きたいことがあります。それは外でもないが、もう私のことは心配するな。親のことを思ひ出して未練な振舞をしてくれるな。父様のお位牌も背負つて来た。兩親してお前に頼むによつて、決して親のことは思はずにお國の爲に盡くしておくれ。船の中に居る悴よ、よく分つたか。分つたら一言聞えたといふ標しるしをしてくれ。」と呼びました。すると、船の中に捧銃まげつをして、「分りました。」といふ標をした者がありました。並居ならる人々は皆感激して泣いたさうであります。

昔、赤穂四十七士の一人富森助右衛門が江戸に出発しようとする時、敵討のことは親に對しても言はれませんので、「これから仕官のため、江戸に参りたうございますから、お暇を戴きます。」と申しましたところ、母は、「敵討に行くのなら喜んで暇をやるが、仕官の爲なら遣ることは出来ぬ。」と答へました。助右衛門は當惑しまして、「實は親・兄弟にも話してはならぬと約束したことですから、どうか

御推量下さい。」と申しました。すると、母は、「よく言つてくれた。それで私も安心した。明朝は快くお前を江戸にやりませう。」と言つて、緋縮緬の小袖を取出し、「これはお前のお祖母様から頂いたもので、お前が嫁を貰つたら遣はしたいと思つてゐたが、今はそれも出来なくなつたから、お前に贈る。母と一緒に居ると思つて、立派な働をしてくれ。今夜は心地よく寝よ。」と言つて、自分は遺書を殘して見事な生害を遂げました。

こんな話は我が國史を讀んで見ますと澤山あります。我が國民が忠實勇武の氣象に富んで居るのも、こんな母の教訓の力によることが多いのであります。

(嘉悦孝子)



## 母の感化

凡そ世の中に何が怖いと云つても、暗殺は別にして、借金ぐらゐ怖いものはない。他人に對して金銭の不義理は相濟まぬことと決定すれば、借金は益、怖くありません。

私どもの兄弟姉妹は、幼少の時から貧乏の味を嘗め盡して、母の苦勞した様子は生涯忘れられません。貧乏士族の衣食住、其の艱難の中に、母の精神を以て、自ら私どもを感化した事の數々ある其の一例を申せば、私が十三四歳の時、母に言ひ附けられて、金子返濟の使をした事があります。其の次第柄は斯う云ふことです。

天保七年、大阪に於て、私どもが亡父の不幸で、母に従つて故郷の中津に歸りました時、家の普請をするとか何とか云ふに、勝手向は勿論不如意ですから、人の

世話で頼母子講を拵へて、一口金二朱づつで、何兩とやら纏まつた金が出来て、一時の用を辨じて、其の後毎年幾度か講中が二朱づつの金を持寄り、闇引にて満座に至りて皆濟になる仕組であるが、大家の人は、二朱ばかりの金の爲に、何年もこんな事に關係して居るのは面倒だと云ふ所から、一時二朱の掛金を出した儘に手を引く者がある。之を掛棄と云ひます。其の實は講主が人に金を唯貰ふやうな事なれども、一般の風俗で、さまで世間に怪しむ者もない。所が、福澤の頼母子に、大阪屋五郎兵衛といふ廻船屋が、一口二朱を掛棄にしたさうです。勿論私は三四歳の幼少の時事で、何も知りませんでした。十三四歳の時、或日、母が私に申すに、「お前は何も知らぬ事だが、十年前にかうく云ふ事があつて、大阪屋が掛棄にして、福澤の家は大阪屋に金二朱を貰うたやうなものだ。誠に氣が濟まぬ。武家が町人から金を恵まれて、それを只貰うて黙つて居る事は出来ません。疾から返したい返したいとは思つてゐたが、どうもさう行かずに、やつと今年



は少し融通がついたから、此の二朱のお金を大阪屋に持つて行つて、厚う禮を述べて返して來い。」と申して、其の金を紙に包んで私に渡しました。

それから私は大阪屋に參つて、金の包を出すと、先方では意外に思うたか、「御返濟など却つて痛み入ります。最早古い事です。決してそんな御心配には及びません。」と言つて、頻りに辭退すれども、私は母の言ふ事を聞いて居るから、是非渡さねばならぬと互に押返して、口喧嘩のやうに争うて、金を置いて歸つた事があります。今ははや數十年も過ぎて、むかし／＼の事であるが、其の時母に言ひ附けられた口上も、先方の大阪屋の事も、ちゃんと記憶に存して忘れません。年月日は覚えませんが、何でも朝の事と思ふ。豊前中津下小路の西南の角屋敷、大阪屋五郎兵衛の家に行つて、主人五郎兵衛は留守で、弟の源七に金を渡したと云ふ事まで覚えてゐます。

こんな事が、少年の時から、私の腦中に遺つて居るから、金錢については、何としても、大膽な横著な舉動は出来ません。私は借金することに就いて大の臆病者で、少しも勇氣がない。人に金を借用して、其の催促に逢うて返す事が出来ないと思ふ時の心配は、恰も白刃を以て後から追掛けられるやうな心地がするだらうと思ひます。(福澤諭吉)

足ることを知れば家は貧しいへども心は福者なり。足ることを知らざれば家は富めりといへども心は貧者なり。此處をよく辨へ、かりにも奢らず物好みをすべからず。諺に、好きが身を亡すといへる、心得べし。

平尾厚康



## 兵士の母

奉天の衛戍病院へ一度に收容されて来た四百の兵は、零下何十度といふ嚴寒の第一線チ、ハルで、想像も及ばない苦戦の結果、負傷したり、凍傷にかゝつたりして、手足を切斷しなければならぬやうな人人ばかりであつた。その時病院には僅かに二人の軍醫と、少數の看護兵が勤務して居るだけで、若干の篤志婦人が晝間の看護の手傳はしたが、晝夜にかけて、この多數の兵に行届いた世話をすることは到底望めなかつた。

かうした陰慘な病院の、夜中の一時二時といふ頃、彼方此方の病室の扉をそつと開けて、中の様子を窺ひ、苦痛に寝入ることも出来ないでゐる兵士達を見つけるとは、傍に寄つて、何かと世話し、慰めて廻る一人の老婦人があつた。その世話

の仕方、心の用ひ方は、尋常の看護婦や附添婦などのそれとは違つて、全く親身も及ばないものであつた。それは傷病兵等のいぢらしい姿が、この老婦人の心を痛ましめただけでなく、兵士達の覺悟——義勇奉公の一念に燃えるやうな、天晴れな覺悟が、深い感激を與へたのに由るものであつた。

目の前のベッドに横たはつて居る兵士達の中には、

「なぜ自分は死ななかつたのだらう。友達が倒れる時、何か言ひ遺すことはないかと聞いてやると、出来るなら兩親に健氣な最期を遂げたと傳へてくれ、と言ひ終らない中に、陛下の萬歳を唱へて、息絶えて行く者ばかりだつた。それを思へば、なぜ自分はその友達と一緒に死んでしまはなかつたのだらう。」  
と、くやしがつて泣く者がある。

又、少しよくなつて、内地へ送還される者は、擔架に乗せられて驛頭へ來ると、見送の戦友がその傍へ來て、堅く手を握り、



「君は内地送還になつても、決して力を落すなよ。足一本なくとも、御國のためには働ける。私は君の分と二人前奮闘するぞ。」

「どうか濟まないが、僕の分も働いてくれ。」

と語り交して居るのもある。

来る日もく、かうした光景ばかりを見詰めて居るこの老婦人は、世の常の婦人の氣附きさうで氣附かなかつた所まで、考へ詰めずには居られなかつた。それは兩親の膝元を遠く離れたこの戦地で傷を受けて、苦しみ悶えて居る多くの若い御國の兵士達を、その本當の母親の心になつて、慰めたり看護して上げる人が出て來ないものだらうかといふことであつた。この不幸不運な傷病兵は何れも皆内地の温かい家庭の可愛い子達ばかりで、憎いといふやうな子は一人もない筈だ。もしこれが國元で怪我でもしたのだつたら、親兄弟や友達まで寄つてたかつて、世話介抱に大騒ぎをする所だ。それが如何に軍人だからとはいへ、御國のためと

はいへ、看病すら手の廻らぬ冷たいベッドの中に、苦痛を訴へる相手もなしに、呻き悩む有様は、御奉公を承知で出征させたとはいひながら、あとに残つた親達には、我が子の身の上を案じ暮し、水垢離をとつたり、好きな物を斷つたりして、無事の凱旋を祈つて居る人もあるに違ない。それなら、今日の前にかうした痛々しい姿の兵士達を見るにつけ、この地に住居する自分達女子は、悉く内地の母親達になりかはつて、兵士達の母となり、心からいたはり慰め、力づけて行かなければならないのではあるまいか。

これが奉天病院の老婦人橋本榮子が、神からの默示のやうに、ふと思ひ入つた覺悟であつた。戦線へと向ふ軍隊を見送るにも、彼女はただ旗を振つて萬歳と呼ぶぐらゐでは氣が濟まなかつた。彼女はいつも足の續くだけ汽車を追つて走つた。「行つていらつしやい。元氣よくね、油斷をしないでね。行つていらつしやい。行つていらつしやい。」



さうして汽車が見えなくなると、天地神明に合掌して、

「どうぞ、この人達をお守り下さいまし。」

と、真心に祈つた。これだけでも、その兵士達を他人と思つて居る者の出来ることではなかつた。

かうして元氣づけて見送る一方では、戦死者の遺骨を乗せた靈柩車が著いたりした。さういふ時、彼女はただ人一倍悲痛の感に打たれただけでなく、どうしても内地の親達にかはらずには居られなかつた。涙ながらに迎へて寺へ送り、其處でしめやかに通夜もして、翌朝はさびしく内地へと送り還すのである。すると數分違ひで、こちらの方では、又新に出動する兵士の見送がある。一方は涙で悄然と送り、又一方は笑顔で元氣よく發たせる。その間の苦しい氣持を、幾度彼女が味はつたことであらう。かういふ時、彼女は狂人のやうにブラットフォームを駆け廻つた。あの老人は氣が變なのではないか、とさゝやく聲なども耳には入るが、

勇み立つて行くのも我が子、遺骨となつて歸つて行くのも我が子、と、母としての思ひやりに心は一ぱいで、人が何と言はうとも、氣になぞ掛けては居られなかつた。

榮子が「多くの親にかはつて」との信念は、單にさうした戦争の場合にのみ現れるのではなかつた。荒涼たる滿洲の地には、其處に駐屯する兵士達の無聊を慰める何物もなかつた。休暇の日の外出にも、その足は自然不良の巷に向ふ恐れがあつた。榮子が「兵士ホーム」を設けたのは、それを救はんがためであつた。かうして出來上つたホームは、娛樂室と圖書室と食堂とを持つて居た。枕を出し、浴衣を揃へて、一風呂浴びたら浴衣でも著て、寝たい人はゆつくりお寝みなさいといった風に、悠遊自適の別世界を彼等のために提供したのである。兵士達は、榮子が同志の人達とつくつてくれた五目飯を頬張りながら、

「なんて旨いのだらう。まるで家へ歸つて來たやうだ。」



と一人がいふと、又一人が、

「僕は奉天へ来るのが楽しみだ。此處へ来ると、お母さんに逢つたやうな氣持がするのだもの。」

と言つて、見合はす互の眼の中には、いつしか涙が光つて居た。

「兵士の母」と、誰言ふとなく言ひ傳へて、寒い滿洲の平野にも、あの赤い夕日のやうな、温かい心を包む婦人のあることを世に知らせた。(下田修身教科書)

埋火のあたりのどかにはらからのまどむせし夜ぞこひしかりける

松平定信

### 繼母のなさけ

余はいとけなき頃より詩歌の道を好み、たま／＼作文などせし折から、稿成りて父に見するに、一つとしてほめられたる事なく、いつも「つたなきことなり。」とて座右に投捨ておかれ、他人のは見てほめ給へば、さりとは、いかゞとのみ思ひ過せしが、後に妻に迎へたる者の、物縫ふこと人にすぐれて、小袖など一日にかさねづつ縫ひて、しかも物縫ふ職人の見では驚くばかり上手なりけり。

余ある時、物縫ふことをひたぶるに愛で賞しけるに、妻の言ふやう、「わらは三歳にして母におくれ、繼母に育てられ、いと厳しき人にて、五六歳より水仕のわざをつとめ、七歳より手習ひ、物読み、裁ち縫ひを教へられ、實の子ならねば、教訓足らじと、そしられんはくちをしとて、羽根つく遊だにえさせて、たゞ物縫



ふことなどのみしひられしかば、折ふしは、はげしき母よと思ひしかども、今となりては、物縫ふわざ人に褒められ侍るは、偏ひとへに繼母のなさけ薄からざる慈愛なり。」と。

これを聞きて、余がいとけなき頃、作文をほめられざりつる父のなさけ、いとありがたきを思ひ合はせぬ。(雲萍雜誌)

子能く親の心を以て心とする時は孝なりと、心誠に孝ありて、毫もわが爲に思ふことなきものは、其の心即ち父母の心なり。

凡そ親の愛敬し給へるものは、我も亦之を愛敬して、なき後までも永く忘れず、是その親の心を以て心とするの義なり。

姫

鑑

## 母 性 愛

きじの羽の錦も鶴の毛ごろも子を思ふをりの色はかはらず

米國で或大火の後、焼死んだ母鳥を動かして見たら、下からびよびよと鳴きながら雛が飛出したいふ。「焼野のきじす、夜の鶴。」——子を思ふ母の愛情は、禽獸と雖も決して變りはない。生れたまゝで、はふつておいては、人間はもとより禽獸でも子は育つものではない。食物を與へた上、暖めもし、保護もしなければならぬ。其所で、自然は母親に子に對する強い愛情を與へたのである。女性は一體に子供が好きであり、子供をかはいがる。女の子が小さい弟妹を愛するのも、母性愛の芽生である。それが愈、母となると、子を見るだけでも何となく嬉しく、抱いたり、乳を吞ましたり、食物を與へたりする事が何より樂しみとなる。母に



取つては、世界の中心は自分でなくて子である。子は母のすべてである。「我が世界は汝のみ。我には、汝のならぬ血の一滴もなし。我はいかに生きるかを知らず、唯汝を愛するのみ。」とは、すべての母の心である。

「その始めて産みしまでは、母の顔花の如くなりしに、子を養ふ事數年なれば、容乃ち憔悴す。水の如き霜の曉、氷の如き雪の夜に、乾ける所に子を廻し、濕へる所に己臥す。子は己が懐に尿すとも、手自ら洗ひ濯ぎて、臭穢を厭ふ事なし。若し子遠く行くあれば、歸りてその面見るまでは、出つ入りつこれを憶ひ、寢てもさめてもこれ憂ふ。己が生のある間は、子の身に代らんとぞ念ひ、己が死去せし後は、子の身を護らんとぞ願ふ。かくの如きの恩徳いかにしてか報ずべき。」と經にもある。「全世界が子を見棄てても、母が子に全世界となる。」「汝の母よりも一層深く汝を愛すと言ふ人は嘘つきである。」とか、「母の打つ手は柔かい。」「母の拳にをれる骨はない。」とかいふのも、皆母の愛の強い事を言つたものである。子が

生れて始めて世話になる人が、かうした母であるといふ事は、子に取つては、この上もない幸福である。

母がこの通りであるから、母に對する子の思もまた甚だ強い。「兒は母の懷を寢所とし、母の膝を遊場とし、母の乳を食物とし、母の情を生命とせり。たとひ飢うるとも母にあらざれば哺はず、渴くとも母にあらざれば咽まず。寒きも母にあらざれば著ず、暑きも母にあらざれば脱がず。」とは、すべてはあなた任せと、子が母にたよる心を強調したものであらう。

これだけ子を愛する母が、これだけたよる子を教育する。いかに母の精神が子に強い感化を與へるかは、想像するに難くあるまい。子は母の乳を吸ひつゝある間に、母の精神をも吸ふのである。子は母親次第である。偉人の傳記を見ても、大概は母が賢い。今日優れた人々の母にも、賢母を求める事は難くない。

母の感化は獨り幼年時だけでなく、成人の後も、老年となつても、やはり強く



子に及ぶものである。大人は赤子の心を失はない。子の母を思ふ心は何時になつても變らない。深草の元政は母を懷うて、「昨夜三更の夢分明に深草に歸る。夢覺めて久しく寢ず。已に寢て曉を知らず。憶ひ得たり母の吾を愛するを。未だ懷抱にあるに異ならず。一日相見ざれば、人の至寶を喪へるが如し。」と言つてゐる。ドイツの詩人ハイネは「自分には聊か骨がある。めつたに人に頭を下げた事はない。しかし、自分は白狀する。楽しい心おきない母の傍に來ると、自分の誇つた勇氣も全く萎びて、自然に頭がさがる。」と言つてゐる。「人は皆その母が婦人なりしが故に婦人を敬ふ。」とか、「婦人が敬はれたくば母になれ。」とか言ふのもそれである。西諺に「搖籃を動かす手は世界を動かす手なり。」といふのがあつた。どんな偉い人も、母の子でない者は一人もない。女性は母として全盛に花咲くのである。若い婦人は、やがてこの潛める靈性を發揮して、母の尊嚴と榮光とを享受すべきである。(下田次郎)

## 久遠の母性

家庭の精神は親子・夫婦・兄弟が苦心して、家庭を經營して行く間に於て、はぐくまれるものである。従つて母の精神は、女性が母となるの初から、生活體驗の痛切なる間に處して、鍛鍊せられ深省せしめられゆくところより、苦惱に依つて産み出されて來るものである。

それは靜かなる世界に於て産み出したるものを、靜かなる世界に於てはぐくむといふことから出立する。而してその至境は沈黙裡に一切を與へるといふことに存する。外にむかつて主張するといふ世界ではなく、内面的に徹底するといふ世界である。己の産み出したるものに自己のすべてを見て、そこに自己を没することの深味を味はふものである。それは無限の反省と無限の包容との統一の世界で



ある。そこに切實なる現實相があり、その現實相に對する隨順の生命の動きがある。人間としての肉體人は、悲痛の思に沈み入らうとしても、そこに開けゆく久遠の世界がある。そこに母なるものは常住に死しつゝ、永遠に新生してゆく。犠牲は我のものであるといふよりも、むしろ久遠の世界のものであり、絶對の心光は低く降り來つて、母なるものに浸みとほり、母は肉體人としての悲痛の底に、却つて永遠の心光に觸れ、しみじみとした喜に慰められて行く。これ實に現實を回避しない眞劍なる母に於て開けるところの、相對・絶對一味の境である。若し、女性にして自己の世界を知り、女性の世界即消極の世界より徹して、無限の世界を直觀するならば、そこに人間の久遠の救濟の道が開けるのである。東西の宗教が相呼應して、或は觀音に、或は聖母に、久遠の母性を見ようとするこの意味は、實に此に存するのである。人或は之を以て過去の事とし、中世の迷信の所産とする者があるかも知れぬけれども、それは外相に拘はる者の論であつて、淺薄

なるものと言はねばならぬ。觀音も聖母も深き母性愛の象徴である。その指示する所は、犠牲の行を行ずる母性を中心とするところの、深き生命の久遠の事實である。東西の文藝も、宗教も、その深きものは、すべて何等かの意味に於て、此の森嚴なる事實を暗示して居る。

一度この事實を認むる以上は、吾人は社會生活と家庭の母との關係についても、エレン・ケイよりも更に深き世界を見なければならぬ。家庭は社會の原始の相である。人類社會の眞實の進歩は、その原始の相たる家庭の内容を豊富にし、深くすることに存する。故に、社會が進めば進むほど、深き問題がそこに出現して來なければならぬ。「女權の問題を解決し、家庭の經濟生活を豊かにすれば、母性は十分なる活動を行ふ。」と稱して居るエレン・ケイは、頗る天下太平であると言はねばならぬ。人間はさほどに機械的なるものではなく、人生はそれによつては解決せられない悲痛事に充滿して居る。極端にまで生活に窮することは、人間性の



發展の上に好ましきこととてないけれども、生活費が十分に與へられれば、母なるものは、よく人間性を養ふなどといふ考は、實に天下太平である。寧ろ人生の深味は様々な苦痛の中から生まれるものである。家庭は單なる慰安の場所ではない。家庭は最も痛切なる人間的經驗の道場である。その痛切なる體驗裡に於て、教育の世界における母性も洗煉せられ、人間生活上の責任感もしみじみ湧き、本能の亂れの中に本能の統一の要求も出現し、而して母性なるものは、この中にあつて、その指揮者・命令者といふよりも、むしろ隠れたる礎となり、一切の抱擁者となつて、こゝに易の所謂坤徳の本源を完成し、人間性の芽生をはぐくむ大地となつて、無爲の中に融々の化を爲すものである。それは決して積極的なる女權の主張から産み出されるものでなく、一步を退いて女性の本質・人生の本源の世界に復歸し行く、深き婦人の自覺から生まれるものである。故にかゝる女性の生命にあつては、缺陷多く悲痛に充つるところの此の人生の現實相が、やがて人間性

の道場として、深き意味の世界に轉換せられるのである。所謂女權確立の黃金時代において、人間の教育が完成せられるのでなく、女權も男子の權利も、沈痛なる人生の底流によつて、悉く流されゆくところの、此の現代の暗暗たる世相をそのままにして、其處に花咲き出づるものこそは、眞に自覺せる母性によつて確立せられる人間の教化である。かくの如きはエレン・ケイの境遇として、又西洋思想一般として、到底思ひもつかぬ事であらうが、かゝる道こそ、家庭が人間教育の道場であるといふことの終局の意味なのである。而して世の多くの女性は、その母となりし初の數年間に於て、かゝる世界の片端なりとも味はひ知らなかつたならば、一生涯徒に「人生、なることなかれ婦人の身。」と叫び、又は「女性に權利を與へよ。」と叫んで、叫び死をするといふ慘たる心境に陥らざるを得ないことになるのである。

エレン・ケイはその母性復興論の終の方に於て、自己の考は樂觀的であると述



べて居る。これに比して、吾人の今述べたところは、よほど悲觀的なる沈痛なる人生の相である。こゝに又反對論の容れらるべき餘地があるやうである。即ち健全なる教育思想は、その根柢が悲觀的のものであつてはならぬといふ反對論である。しかしながら、この反對論には非常なる弱點があることを、吾人は指示しなければならぬ。凡そ理想を前途に立て、又は憧憬の情を將來に寄せて、これに向かつて生活するといふことは、健全なる生活であるやうに見えるけれども、實はそれは人生及び自己の全形相を見ざる生活である。人間的にいへば、現在は過去を含み、未來を孕むものである。而して過去・現在・未來ともに、實體的に存在するものではなく、常恒流轉の形相に、假に名づけたものに過ぎない。若し母性の完成の時期、母の安樂の日を將來に見て、これを目的とするといふならば、それは實體ならぬものを實體とする迷に陥つたものである。而して過去及び現在に生活する個々の母は、未來の母性の完成のための踏石であるといふことになるので

あるが、その未來は永遠に未來であるから、個々の母なるものも永遠の踏石となるわけである。此の如き現實相に振りかへつたならば、吾人はどうして安價なる樂觀論を唱へることが出來ようか。此に於てか吾人は、現實の母性の苦惱と犠牲との生活そのものを離れて、未來に理想の世界があるのではないと言はねばならぬ。若し今日理想と考へて居るやうな生活が、將來に於て實現せられても、その時には新なる人間苦が母性に絡まるのであつて、母性が具體的人間を離れぬ限り、決して苦惱を脱することはないのである。此に於てか吾人は、未來や理想を徒らに憧憬して、現實の苦惱を回避する生活が、人間として決して眞實のものでないことを痛感すると共に、此の現實に赤裸々に當面する以上は、厭世悲觀に至らざるを得ないことを感ずるものである。しかし不徹底なる厭世觀ならば、安價なる樂觀と共に吾人の興せざるところである。吾人の味はふところは徹底的の厭世悲觀である。人生を産み、人生を包擁するといふ意味に於て、最も尊き母性が、最



も深くこの人生の苦惱を味はふといふ現實のこの人生の相は、吾人をして人生の究竟的無意義に徹せしめざるを得ない。而して人生の無意義に徹する心こそは、この無意義の人生に徹する久遠の光を見る心であり、苦惱の中に生滅流轉せる個々の母といふものを通じて、久遠の母性を仰ぐ心である。この間の消息は實に微妙であつて、吾人は母の世界に於て、人生が遂に否定せられゆく相に哭泣しつゝも、翻つて又久遠の母性の心光に安住し、母を通じて味ははるゝ人生の尊さに涙するのである。

かくの如きは實に吾人の生活體驗そのものである。エレン―ケイの如くに、未來の夢の國に憧れて樂觀する餘裕は、吾人にはないのであるが、しかし吾人にはエレン―ケイよりも更にまさつて深き人生の尊さの味がある。過去より現在を通じて未來にわたる生滅流轉の幻影の如き人間の母の相をば、永劫の相において見る。數十年、數百年の後において、初めてこの人生に母性の圓滿なる出現を見る

といふやうなことではなく、子供の病を看護せる母、子供のことに悲觀する母、否更に進んで、子供をかへりみずして沈淪墮落し、而して後にまた自己の現實相を傷む無慈悲の母においてさへも、吾人はそこにそれを離れずに、永遠の母性の姿を見、時間的の未來が來るを待たずして、そのまゝに現實の夢の中に、嚴肅なる眞實の光を見る。現世にあつて現世を超越し、現世を超越して現世に處する夢の國は將來にあるのでなく、人生の一切は夢と觀ぜらるゝところに、その夢の中に夢ならぬものがある。こゝにおいては、母性は人生の苦惱を通して、永遠に復興しつゝあるのである。必ずしもエレン―ケイのいふ如き社會制度の完備する時を俟たないのである。(福島政雄)



## 順禮唄

「普陀落や岸打つ浪は三熊野の那智のお山に響く瀧つ瀬。」年はやうくとほくの道をかけたる笈摺かひざに、「同行二人。」と記せしは、一人は大悲の蔭頼む、「故郷をはるく此處にきみる寺、花の都も近くなるらん。」「順禮に御報謝。」といふも優くになまりき國訛。「ても、しをらしい順禮衆、どれく報謝進ぜう。」と、益にしらげの志。「あいく、有難うござります。」と、いふ物越から爪はづれ、可愛らしい娘の子、「定めて連衆つれしゆは親御達、國はいづく。」とたづねられ、「あい、國は阿波の徳島でござります。」「うゝ、何ぢや、徳島。さつても、それはまあ懐かしい。わしが生れも阿波の徳島。さうして父様ちちさまや母様かきさまと一緒に順禮さんすのか。」「いえいえ、其の父様や母様に逢ひたさ故、それでわし一人西國するのでござります。」と、聞いて

どうやら氣にかゝる。

お弓はなほも傍に寄り、「うゝ、父様や母様に逢ひたさに、西國するとは、どうした譯ぢや。それが聞きたい。まあ、其の親達の名は何といふぞいの。」「あい、どうした譯ぢや知らぬが、三つの年に、父様や母様もわしを祖母様おばさまにあづけて、何處へやら往かしやんしたげな。それで、わたしは祖母様の世話になつてゐたけれど、どうぞ、父様や母様に逢ひたい顔が見たい、それで方々を尋ねて歩くのでござります。父様の名は阿波の十郎兵衛、母様はお弓と申します。」と、聞いて恟おろくり、お弓は取付き、「これ、これ、これ、あの父様は十郎兵衛、母はお弓、三つの年別れて、祖母様に育てられてゐたとは。」疑もない我が娘と、見れば見るほど、稚顔こゝろなほ見覚えのある額の黒子。「やれ、我が子か懐かしや。」と、言はんとせしが、いや待て暫し。夫婦は今にも取らるゝ命、固より覺悟の身なれども、親子と言はば、此の子にまでどんな憂き目がかゝらうやら。それを思へば、なまなかに名のりだてして



憂き目見んより、名のらて此のまゝ返すのが、却つて此の子が爲ならんと、心を静め、よそくしく、「おゝく、それはまあく、年はも行かぬに、遙々の處をよら尋ねに出さしやつたのう。其の親達が聞いてなら、さぞ嬉しうて、嬉しうて、飛立つやうにあらうが、まゝならぬが世の憂き節、身にも命にも代へて、可愛い子を振棄てて、國を立退く親御の心、よくよくのことであらうほどに、むごい親と必ずく恨まぬがよいぞや。」「いえく、勿體ない。何の恨みませう。恨むることはないけれども、小さい時別れたれば、父様や母様の顔も覺えず、餘所の子供衆が、母様に髪結うて貰うたり、夜は抱かれて寝やしやんすを見ると、わしも母様があるなら、あのやうに髪結うて貰はうものと、羨ましうござんす。どうぞ早う尋ねて逢ひたい。ひよつと逢はれまいかと思へば、それが悲しうござんす。」と、泣いじやくりするいちらしさ。

母は心も消え入る思。「さてもく、世の中に、親となり子と生るゝほど深い縁

はなけれども、親が死んだり、子が先立つたり、思ふやうにならぬが浮世。此方もどれほど尋ねても、顔も處も知らぬ親達、逢はれぬ時は詮ない事、もう尋ねずと國へ往んだがよいわいの。」「いえく、戀しい父様や母様、たとひ何時までか、つてなと、尋ねうと思ふけれど、悲しいことは一人旅ぢやてて、何處の宿でも泊めてはくれず、野に寝たり、山に寝たり、人の軒の下に寝ては擲かれたり、恐いことや悲しいこと。父様や母様と一緒にゐたりや、こんな目に逢ふまいものを。何處にどうしてゐやしやんすぞ。逢ひたいことぢや、逢ひたい。」とわつと泣き出す娘より、見る母親は堪りかね、「おゝ道理ぢや。可愛や、いちらしや。」と、我を忘れて抱きつき、前後正體なげきしが、是ほど親を慕ふ子を、何と此のまゝ往なされう。いつそ打明け名のらうか。いやく、それでは此の子も同じ罪。其の時の悲しさを思ひ廻せば、往なすが爲と、「おゝ、段々と様子を聞き、我が身のやうに思はれて、悲しいとも情ないとも、言ふに言はれぬことながら、とかく命が物種、ま